

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## Traditional Knowledge and Techniques of Building on Elato Atoll, Caroline Islands, Micronesia

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉藤, 重信 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00004480">https://doi.org/10.15021/00004480</a>

## 家屋の建築・修復に関する伝統的知識と技術

— ミクロネシア・エラート環礁の場合 —

杉 藤 重 信\*

Traditional Knowledge and Techniques of Building on  
Elato Atoll, Caroline Islands, Micronesia

Shigenobu Sugito

This paper describes the application of traditional knowledge in the building and in the repair and reconstruction of buildings on Elato Atoll, Caroline Islands, Micronesia. The paper consists of three parts; (1) typology of buildings, the process of building, and the system of measurement; (2) repairing and reconstruction of buildings; (3) and specific, traditional knowledge, called *rong*.

Buildings on Elato Atoll are usually constructed differently according to function and purpose. Three basic types are distinguished locally: *imw*, *fale*, and *mwaluumw*. The *imw* category includes the dwelling house, spirit house, menstruation house, and delivery house; *fale* denotes the canoe house and meeting house; and *mwaluumw* mainly refers to the cooking house.

The Elato measurement system used in building construction plays important roles in determining the sizes of the buildings as well as in the constituent parts, such as longitudinal tie-beams, tie-beams, ridge-pole, king-posts, and rafters. Measurement is mainly based on the “halving system”, especially important being (1) the length of longitudinal tie-beams, (2) the ratio between longitudinal tie-beam and tie-beam, (3) the ratio between tie-beam and king-post, and (4) intervals in laying rafters.

The traditional knowledge applied to building repairing and reconstruction is called *rongolibaang*. It permits a small group of people to quickly reconstruct a building without taking it entirely to pieces. This knowledge deals with six major parts of the building; supporting-posts, longitudinal tie-beams, tie-beams, rafters, ridgepole, and the whole roof.

\* 甲南大学文学部，国立民族学博物館共同研究員

Two types of knowledge are locally distinguished; *reepiy* (common knowledge) and *rong* (closed knowledge which is kept by a specific membership and concerns the spirit, *yalius*). This *rong* is esoteric knowledge and is considered to be handed down directly from *yalius*. It is inherited according to specific rules.

Since 1954, Elato has been Christianized and indigenous beliefs have declined. Most traditional knowledge has also been forgotten. However, this particular *rongolibaang* is the one of the few elements that still remains, since it is technically effective and useful in the daily life of the islanders.

I. はじめに	IV. 家屋の建築と計測法
1. 本稿の目的	1. 建築
2. 調査地の概要	2. 計測法
3. 言語と表記	V. 家屋の修復
4. 調査方法	1. 三種類の <i>rongolibaang</i>
II. 家屋の構造	2. 補助材
1. エラート環礁の家屋	3. <i>rongolibaang</i>
2. 家屋の構造	VI. 伝統的知識とその変容
3. 用材	1. <i>rong</i> と <i>reepiy</i>
III. 家屋の類型	2. <i>rong</i> の社会的意味
1. 機能にもとづく類型	3. 伝統的知識の変容
2. 屋根構造にもとづく類型	VII. おわりに
3. 壁構造と土台構造にもとづく類型	

## I. はじめに

### 1. 本稿の目的

本稿は、ミクロネシア・中央カロリン諸島のエラート環礁 (Elato Atoll) における家屋の建築および修復に関する伝統的知識について、民族誌的記述をおこなうことを目的としている。本稿は3つの部分からなっている。まず、(1)エラート環礁の家屋についてその概要および類型を略述し、家屋の建築過程および家屋建築のための計測法についてのべる。つぎに、(2)エラート環礁における家屋修復の技術についてのべる。最後に、(3)エラート環礁における伝統的知識の観点から家屋に関する知識について考察する。

ミクロネシアにおける家屋研究はこれまで比較的すくなく、物質文化についての研究や民族誌の一部としてとりあつかわれた場合がおおい<sup>1)</sup>。しかし、最近、家屋について詳細な報告がうまれている [杉本 1980: 175]。

西カロリン諸島のヤップ島の家屋について、詳細な報告がある [小林 1978]。これはヤップ島の家屋を日本に移築するさい、その構造および建築の過程を詳細に調査し、記録したものである。くわえて、ヤップ島における家の住まい方、建築のさいの儀礼、およびヤップ島における各種の家屋についての比較をおこない、ミクロネシアの他の地域の家屋との構造比較をこころみている。

トラック諸島のウート（カヌー格納庫・集会所）についても、詳細な報告がある [浅川 1980]。これは、トラック諸島トル島のファウバ遺跡の公園化にともなって同遺跡内にウートが建築されることになり、報告者の浅川滋男がその現場にたちあい、ウートの建築過程について記録したものである。トラック諸島において、すでに伝統的な建築様式の建物は絶滅寸前となっており、それゆえこの報告は伝統的な建築技術を後世につたえるためにその過程を刻明に記録するという目的もになっている。トラック諸島の伝統建築に関して、その分棟型式や方位、平面型の変遷過程などについてもふれている。

本稿でとりあげるエラート環礁の家屋に関しては部分的にこれまでいくつか報告がなされている。入手したかぎりでは、最初の資料はドイツの「Südsee-Expedition 1908-1910」のさい、隊員の P. Humbruch がエラート環礁にしばらく滞在し、報告したものである [KRÄMER 1937]。そのなかで家屋に関しては、妻びさしの部分が円

1) ドイツ統治時代 (1898—1918) におけるミクロネシア研究 (ここでは中央カロリン諸島周辺にかぎる) では、1908年から1910年にかけておこなわれた Südsee-Expedition の成果が重要である。トラック諸島については Krämer [1932] およびトラック離島については Damm and Sarfert [1935] がある。また、中央カロリン諸島のラモトレック環礁およびエラート環礁、ウォレアイ環礁、フェイス島については Krämer [1937] が、イファリック環礁、エウリピック環礁、フチャイラップ環礁、ソロール環礁、ユリシー環礁については Damm et al [1938] がある。これらの研究はいずれもそれぞれの島じまの民族誌の作成を志向しており、家屋にかぎっていえば、その報告は家屋の部分名称や住まい方などの点にかぎられている。そのほか、ドイツ統治時代の成果としては、1912年頃トラック諸島を調査した Bollig [1927] がある。

日本統治時代 (1918—1945) には、ひろくミクロネシア全体を渉猟した報告がうまれている。ミクロネシアの島じまの民族誌をめざした 松岡 [1943] および民具などの物質文化に関しては 染木 [1945] がある。これらの場合もドイツ統治時代と同じく、家屋に関していえば不十分なものととどまっている。そのほか、第一次世界大戦開戦後まもなく日本はミクロネシアに進駐したさい、そのおもな島じまの調査をおこない、報告書を出版している。そのひとつに Matsumura [1918] がある。これは衣食住に関するものであるが、家屋については、それぞれの島についてわずかな数頁づつの報告にとどまっている。

アメリカ統治時代 (1945-1981) については、家屋に関して言及のあるものに、イファリック環礁の民族誌である Burrows and Spiro [1970] およびトラック諸島の物質文化研究である LeBar [1963, 1964] がある。

錐形をなしている点 [KRÄMER 1937: 84-86] および、家屋名をあげている [KRÄMER 1937: 30-31]。染木 照は、連絡船がエラート環礁に一時寄航したさい、島の風俗や家屋について観察している。かれは、エラート環礁の家屋はヤップ式の六角平面をもち、土壇はなく、平地に丸石をならべ、サンゴの破片を敷きつめて建てられているとのべている [染木 1945: 407]。W. Alkire はエラート環礁に3週間滞在し、おもにラモトレック環礁との関係について調査している [ALKIRE 1965]。家屋については、住居配置図と家屋名をあげているのみである [ALKIRE 1965: 156]。

本稿は、エラート環礁の家屋およびその建築について、ミクロネシアの最近の家屋研究の傾向にならってできるかぎり詳細な民族誌的記述をおこない、ミクロネシアにおける家屋研究をより進展させるための資料となりうることを期している。

つぎに、ミクロネシアの家屋研究においては、家屋の建築にかかわる報告は数多く存在するが、家屋の修復に関するものについては詳細な研究が皆無に近い。わずかにイファリック環礁の民族誌 [BURROWS and SPIRO 1970] が家屋修復の技術について若干言及している。そこでとりあげられているのは、柱の交換・桁の交換・屋根の復原およびそれに使用される補助材についてである [BURROWS & SPIRO 1970: 65-68]。しかしながら、それは調査期間中に観察されたものにとどまっており、家屋修復に関する技術全般にわたるものではない。そこで、本稿では、エラート環礁における家屋修復に関する知識の全容について、できるかぎり詳細な記述をおこなう。

最後に、エラート環礁における家屋修復に関する伝統的知識 (rongolibaang) は、rong という知識のカテゴリーにふくまれる。rong にかかわる知識については、エラート環礁の周辺島々における例がこれまでいくつか報告されている。すなわち、伝統的宗教との関連において、トラック諸島の民族誌 [BOLLIG 1927] およびイファリック環礁の民族誌 [BURROWS and SPIRO 1970] が rong に言及している。また、トラック諸島の例としては、家屋やカヌーなどの物質文化研究との関連で rong に言及したもの [LEBAR 1963, 1964]、文化価値との関連で rong に言及したもの [CAUGHEY 1977]、および財産の概念や親族組織との関連で rong に言及したもの [MURDOCK and GOODENOUGH 1947] がある。また、サタワル島の例としては、rong について概説したもの [石森 1980]、数占いについて詳述したもの [石森 1979]、および伝統的航海術について詳述したもの [秋道 1980a, 1980b, 1981a, 1981b, 須藤 1979b, 1980a] がある。本稿では、こうした報告をふまえ、rong についてあきらかにし、家屋の建築および修復に関する知識を例にして rong の変容について若干の考察をくわえる。

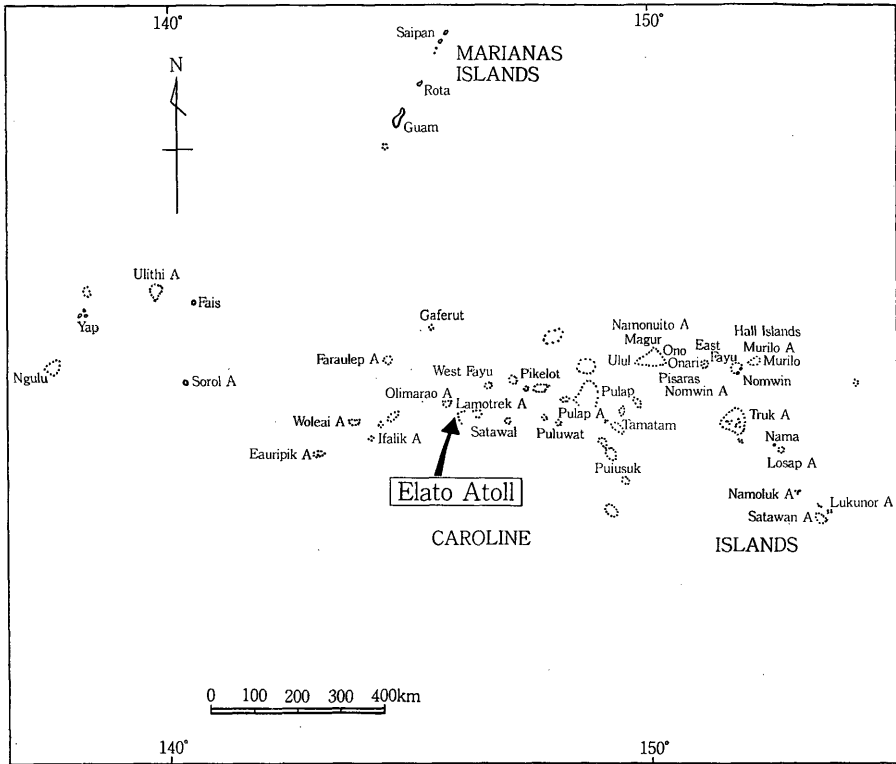


図1 マリアナ諸島およびカロリン諸島の部分図

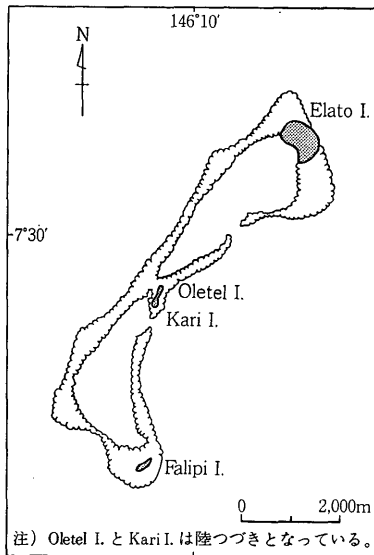


図2 エラート環礁

## 2. 調査地の概要

筆者が調査をおこなったエラート環礁は、カロリン諸島のほぼ中央にあり、北緯7度27分30秒から7度31分30秒、東経146度8分30秒から146度11分30秒にかけて位置する。

エラート環礁は、サンゴ礁上の4つの小島と2つの礁湖からなる。住民が居住するのは環礁の北東端に位置する周囲約3キロメートルのエラート島で、人口は96名(1979年6月現在)、内訳は男子47名女子49名である。

エラート島は、北方におおきくふくらんだ弧状をなしており、礁湖に面した側は砂浜で、外洋に面した側は造礁サンゴがあらわになっている。エラート島の最高点は標高約4メートルで外洋側にあり、礁湖の側は全体に低い。島の中央部には周囲1キロメートルばかりの湿地帯があり、タロイモ(wot: *Colocasia esculenta*, bulag: *Cyrtosperma chamissonis*)の栽培地となっている。島のそのほかの部分には、ココヤシ(liu: *Cocos nucifera*)、パンノキ(mai: *Artocarpus* spp.)などの有用樹におおわれている。

## 3. 言語と表記

エラート環礁(以下エラートと略記する)の人びとのもちいるエラート語はオストロネシア語族に属する言語である。エラート語はそのうちミクロネシア諸語に属するトラック言語群にふくまれる[杉田 1981: 228]。エラート語はトラック言語群のなかでもウォレアイ語にちかく、音韻や語彙において若干ことなるものの文法的な差異はごくわずかである[SOHN 1975: 5]。本稿では、エラート語の音声表記について Wol-

表1 エラート語の音声表記(母音)

	前舌	中舌	後舌
高舌	i, ii	iu	u, uu
中舌	e, ee	co	o, oo
低舌		a, aa	oa

[SOHN and TAWERILMANG 1976]により作成。

表2 エラート語の音声表記(子音)

	両唇音	唇歯音	歯茎音	硬反口蓋音	硬口蓋音	軟口蓋音
閉鎖音	p, pp		t, tt		ch	k
鼻音	m, mm mw, mmw		n			ng, nng
摩擦音	b, bb	f, ff	s, ss	sh r		g
ふるえ音			l			
半母音	w, ww				y	

[SOHN and TAWERILMANG 1976]により作成。

*eaian Reference Grammar* [SOHN 1975] および *Woleaian-English Dictionary* [SOHN and TAWERILMANG 1976] の表記法にしたがっている (表1, 表2)。

#### 4. 調査方法

本稿における資料は1979年5月から1980年3月にかけて、および1980年12月から1981年1月にかけての2度にわたるフィールド・ワークでえられたものである。

本稿の資料のうち、家屋に関する全般的な情報ならびに家屋の計測法については、おもに Sautal 氏 (1979年現在64歳)、Maliumai 氏 (1979年現在47歳)、Chigwemal 氏 (1979年現在27歳) からえた。

「家屋修復の伝統的知識」に関しては、1979年10月から1980年1月にかけて断続的に Maliumai 氏から教えをうけた。なお、Maliumai 氏はエラートの3人の *taubaang*<sup>2)</sup> のうちのひとりであり、かれの母方のオジから知識をうけついでいる。

*rong* はのちに述べるように秘儀性の高い知識であり、ある特定の継承ルールによってのみ習得することができる。本稿に記述した *rongolibaang* は、そうした伝統的なルールにしたがって筆者が習得したものである。なお、*rong* の継承法についてはのちにふれる。

Maliumai 氏は *rong* の伝授にさいして、他者による盗み聞きをおそれ、昼間にしかも見通しのきく場所でおこなうことを希望した。伝授はおもに口頭でおこなわれ、筆者はそれをフィールド・ノートに記録した。不明の点は、氏がココヤシの葉柄などをつかって立体的に説明し、さらに不明な点は、実際に建物にでむいて教えをうけた。

なお、フィールド・ワークのさいには、現地語および英語、日本語を併用してもちいた。

---

2) *taubaang* とは、*tau-* と *baang* とからなる語で、*baang* とは「修復する」の意である。*tau-* とは、*Woleaian-English Dictionary* によれば、「特定の分野での特別の知識あるいは技術をもつ人、専門家」をさす接頭辞である [SOHN and TAWERILMANG 1976: 146]。したがって、*taubaang* とは、「修復の知識あるいは技術をもつ人」もしくは「修復の専門家」ということになる。*taubaang* は *taurong* とよばれる人びとのうちのひとりである。*taurong* とは、「*rong* の知識あるいは技術をもつ人」もしくは「*rong* の専門家」を意味する。しかし、*tau-* 接頭辞のつく人びとがすべて *taurong* にふくまれるわけではない。たとえば、*taufale* や *tauimw* はそれぞれ、「カヌー格納庫の保守管理をする人」、「母屋の保守管理をする人」を意味する。



表3 エラートの家屋

家屋名	棟高	梁間	桁行	種別	所属
(1) Latowa	440	350	450	f	Mo, Gw
(2) .....	285	240	350	m	Mo
(3) Gasuereol (Libolirang)	410	330	720	i	Mo
(4) Geleisiya	420	370	690	-	-
(5) Spital	390	640	1450	-	-
(6) Welipiy	570	440	640	f	Gw, Go, Sw
(7) Sepal	380	310	700	s	Gw
(8) Metaar	650	520	1080	f	Gw, Sf
(9) .....	295	200	390	m	Gw
(10) Fasseour	400	300	540	i	Gw
(11) Lugal	410	330	500	i	Gw
(12) .....	...	490	730	-	Gw
(13) Gatiyafash	400	330	520	i	Gw
(14) Wolippar (Weligeshushu)	400	270	430	i	Gw
(15) Maifash	380	320	640	i	Gw
(16) .....	270	280	430	m	Gw
(17) Rugulong	500	390	470	f	Sw, Sf
(18) Gateopalei	560	620	1030	f	Sw
(19) Fassefang	340	250	350	i	Sw
(20) Faliyap	410	300	750	i	Sw
(21) .....	325	260	380	m	Sw
(22) Lugeriya	450	340	960	i	Sf
(23) .....	360	250	540	m	Sf
(24) Gatiyerang	320	250	350	i	Sf
(25) Faligiliyaw	470	390	700	i	Sw
(26) .....	295	290	220	m	Sw
(27) .....	280	180	280	m	Sw
(28) Lemeoluw	370	240	370	i	Sw
(29) Lemeoluw	430	340	900	i	Sw
(30) Imwepeo	370	240	330	i	Sw
(31) .....	400	280	570	m	Sw
(32) Salingeluw	370	320	650	i	Sw
(33) Gatiyafash	390	350	630	i	Gw

注1 「種別」の記号。

f: fale カヌー小屋      i: imw 母屋      m: mwaluumw 炊事小屋  
s: sepal カヌー小屋

注2 「所属」の記号。出自集団 (gailang) の名称である。

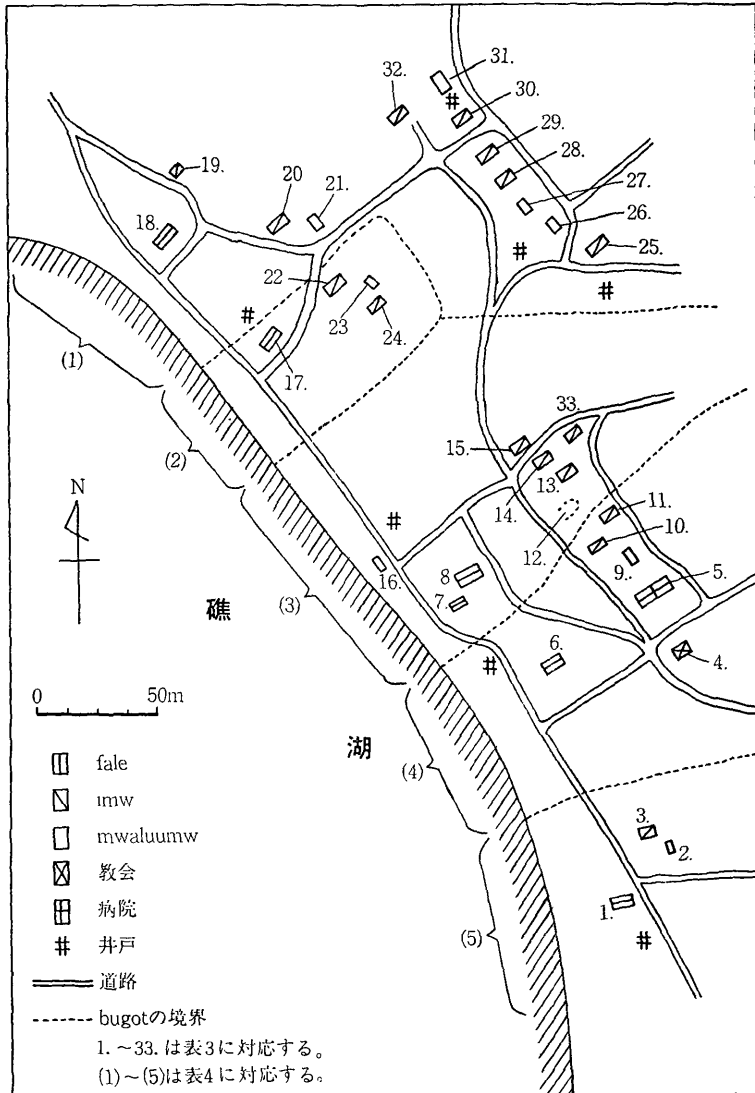
Go: Geofaliu      Gw: Gailengaliweleya      Mo: Mogolifash  
Sf: Saufalashig      Sw: Sauwel

注3 (12)の家屋は建築途中で放置されたままとなっている。完成すれば、鉄筋コンクリートの柱をもつはじめての家屋となるはずである。

## Ⅱ. 家屋の構造

### 1. エラート環礁の家屋

エラートにおける家屋には、おおきくわけて、fale と imw と mwaluumw とがある。fale とは「カーネ格納庫・集会所」であり、imw は寝所である「母屋」、mwalu-



注) 家屋の大きさは縮尺と一致しない。

図3 住居配置

umw は「炊事小屋」をさす。これらは、その使用目的に応じて別棟にする、いわゆる分棟形式にしたがっており、東南アジアからオセアニア島嶼部にかけて広範に分布がみられる形式である [杉本 1977: 175]。

エラートの個々の家屋に関するデータは表 3 にしめしたとおりである。名前のつけられている家屋は 24 戸あり、そのうち fale は 6 戸、imw が 16 戸で、ほかに Geleisiya

表 4 bugot の 構 成\*

- 
- (1) Iyefang (Gateopalei)  
 gailang: Sauwel, Geofaliu  
 fale: 17. Rugulong, 18. Gateopalei  
 imw: 19. Fassefang, 20. Faliyap, 25. Faligiliyaw,  
 28. Lemeoluw, 29. Lemeoluw, 30. Imwepeo,  
 32. Salingeluw  
 mwaluumw: 21. 26. 27. 31.  
 人口: 男 22, 女 20
- (2) Lugeriya  
 gailang: Saufalashig  
 fale: 17. Rugulong  
 imw: 22. Lugeria, 24. Gatiyerang  
 mwaluumw: 23.  
 人口: 男 2, 女 3
- (3) Woligeshushu  
 gailang: Gailengaliwelea  
 fale: 8. Metaar  
 sepal: 7. Sepal  
 imw: 13. Gatiyafash, 33. Gatiyafash, 14. Wolippar  
 (Woligeshushu), 15. Maifash  
 mwaluumw: 16.  
 人口: 男 15, 女 18
- (4) Lugal  
 gailang: Gailengaliwelea, Sauwel  
 fale: (6.) Wolipiy  
 imw: 10. Fasscour, 11. Lugal  
 mwaluumw: 9.  
 人口: 男 6, 女 5
- (5) Iyuur (Libolirang)  
 gailang: Mogolifash  
 fale: 1. Latowa  
 imw: 3. Gasuereol (Libolirang)  
 mwaluumw: 2.  
 人口: 男 2, 女 3
- 

\* 家屋名によって示した。なお、家屋名に付した番号は 図 3 表 3 と対応している。

とよばれる教会, Spital とよばれる診療所がある。家屋としては, このほか家屋名のない mwaluumw が9戸ある。あわせて33戸がエラートの総家屋数である<sup>3)</sup>。ただし, 仮設の家屋は計上していない。なお Geleisiya はスペイン語の iglesia (教会) に由来し, Spital は英語の hospital が語形変化したものとのことである。

これらの家屋のうち, 外来の建築法により建てられたものは Spital および 12. の家屋だけである。Spital は鉄骨プレハブ製で, 屋根が集水装置となっている。そのほかの家屋は, たとえば壁材などに外来のものがかかわれているものもあるが, 基本的にはすべて伝統的な建築様式によって建てられている。

エラートの社会は母系社会であり, 生まれた子供の集団帰属および土地や酋長位の相続は, 母系出自集団である gailang を単位としておこなわれる。しかし, 生産・分配などの日常生活は, bugot とよばれる単位を中心にいとなまれる。bugot は, 一般に「土地」を意味する語であるが, 「居住区」<sup>4)</sup>をも意味する語である。「居住区」としての bugot は, 理想的には一棟の fale と一棟の mwaluumw およびいく棟かの imw とからなり, 基本的に同一 gailang に属する複数の家族が生活をともにする単位である。現在, エラートには5つの bugot がある。それぞれ Iyefang (Gatopalei), Lugariya, Woligashushu, Lugal, Iyuur (Libolirang) と名づけられている。その配置については図3に, 所属する gailang 名・家屋名・人口などについては表4にしめした。

## 2. 家屋の構造

エラートの伝統的な家屋は, 切妻屋根をもち, 両妻側には円錐状の妻びさしがある。屋内には天井はない。柱は掘っ立て柱である。棟持ち柱はなく, 真束構造となっている。

母屋 (imw) は基壇 (taiif) の上にたてられる。基壇には, 小丘をつくるものとそうでないものがある。しかし, いずれの場合もサンゴの小片 (faiumwag) がまかれて他とは区別される。基壇のうち縁石で境界をつくる場合とそうでない場合がある。前者は, 直径20—30センチメートルばかりの石 (faiu) で基壇を区切り, 平地から約20センチメートル高くなっている。後者は, ただなだらかな小丘となっている場合である。なお, 現在エラートの森のなかには小丘がいくつかあるが, これらは住居跡で

3) 1909年に Südsee-Expedition 1908-1910 の構成員である P. Humbruch が報告したところでは, 当時のエラートには26戸の家屋があり, そのうち家屋の固有名で現在の家屋と照合できるのは9戸である [KRÄMER 1937: 30-31]。

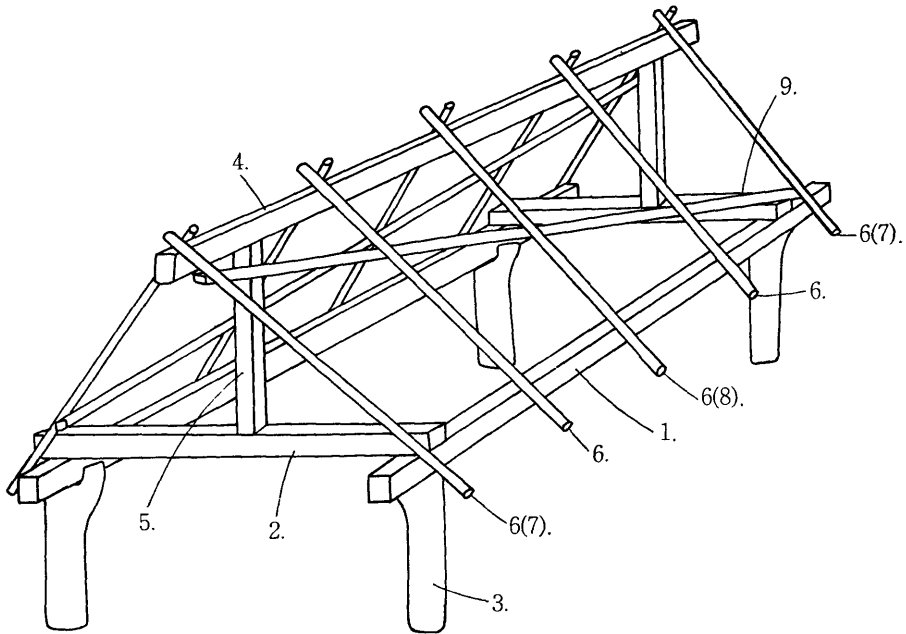
4) bugot の訳語については須藤 [1979a: 266] を参考にした。

あり, peoisaar とよばれる。ところで, taiif はヤップ語の def との関連がかんがえられる。ヤップにおいて def とは長六角形に石積みした基壇で, 家屋はそのうえに建てられている [小林 1978: 2]。しかし, エラートの場合, taiif にはそうした石積みはない。

屋内には, 間仕切りがなく, 一間取りである。床はもうけられず, 土間のままである。ただし, 土間にはココヤシの葉で編んだ敷物 (teppagau) がしかれ, 就寝時にはパンダナス (*Pandanus sp.*) の葉で編んだ敷物 (giyegiy) がさらにしかれる。

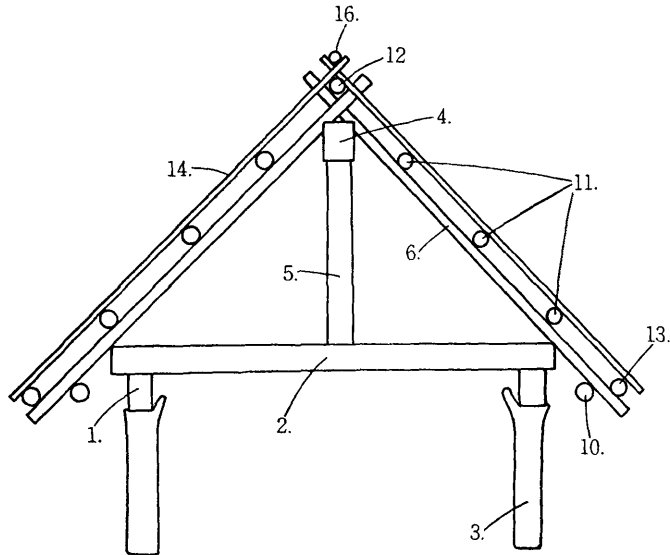
伝統的な家屋の建築にあたってはクギを1本もつかわない。構造材はココヤシ殻繊維でつくったロープ (gologol) でしばられるのみである。板壁 (tipaap) をもつ家屋 (imwtipaap) もまたクギをつかわず, 部材を組みあわせて建てられる。

なお, 家屋構造の部分名称については, 表5にしめした。fale および imwtegile の家屋構造および主要部分名称については図4に, imwtipaap のそれは図5に, それぞれしめすとおりである。



- |                  |       |                |         |
|------------------|-------|----------------|---------|
| 1. taliy Lap     | 桁     | 2. goisham     | 梁       |
| 3. siur          | 柱     | 4. ungolap     | 棟木      |
| 5. boot          | 棟東    | 6. weoi        | 垂木 (総称) |
| 6(7). weoilimaat | 両端の垂木 | 6(8). weoiluug | 中央の垂木   |

図4-1 家屋の軸組



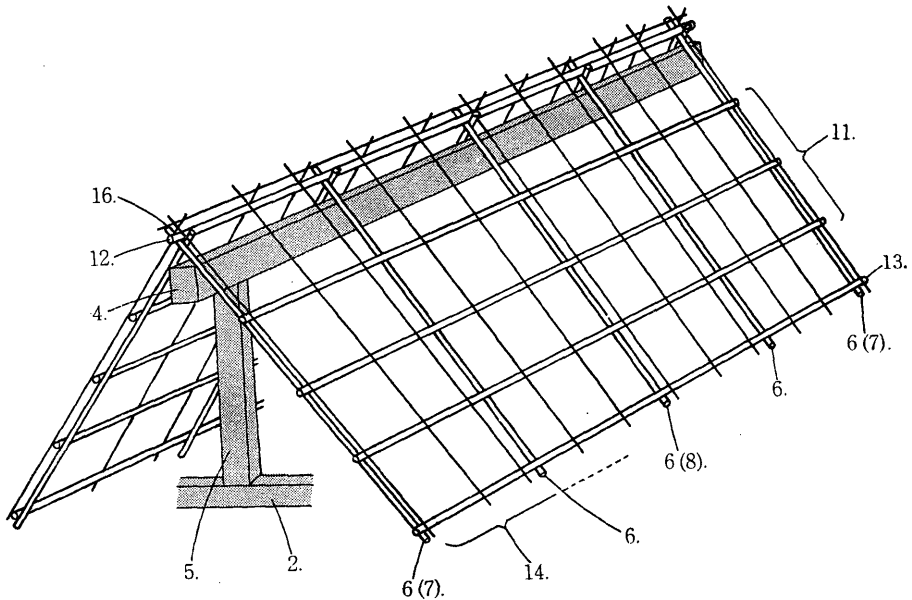
- |                 |      |                 |       |
|-----------------|------|-----------------|-------|
| 1. taliyelap    | 桁    | 2. goisham      | 梁     |
| 3. siur         | 柱    | 4. ungolap      | 棟木    |
| 5. boot         | 棟束   | 6. weoi         | 垂木    |
| 10. meleufeoioi | 軒桁   | 11. gapangag    | 水平材   |
| 12. ungoshig    | 第2棟木 | 13. gappiliweoi | 下部水平材 |
| 14. gat         | 第2垂木 | 15. sogoram     | 第3棟木  |

図4-2 家屋の断面

### 3. 用材

エラートの家屋にもちられる用材は、すべてエラート内に生育する有用樹でまかなわれる。特定の部材に特定の種類の樹木が用材としてもちられる。とりわけ重要視されるのは柱材として使用される樹木の種類の選択である。

エラートはサンゴ礁の島であるために標高が低く、すくなくとも居住地域にかぎっていえば、標高1メートル未満である。居住地域の砂地を掘ると、潮位によって地下水面が上下するのでいちがいにはいえないものの、50センチメートル程度掘ると水分がにじみでてくる。柱は家屋の規模によるが、すくなくとも50センチメートルから1メートルほどの深さの穴に、その下部が埋めこまれることになる。fisifis といって土中に埋めこむ部位を焼いて腐食をふせぐよう手当がなされる。しかし、たとえばパンノキについていえば、柱材としてもちいた場合、耐久性を欠くといわれている。そこで、柱材の選定にはとくに注意がはらわれ、以下にあげる用材がとくにこのまれる。



2. goisham	梁	4. ungolap	棟木
5. boot	棟束	6. weoi	垂木
6(7). weoilimaat	両端の垂木	6(8). weoiluug	中央の垂木
11. gapangag	水平材	12. ungoshig	第2棟木
13. gappiliwcoi	下部水平材	14. gat	第2垂木
16. sogoram	第3棟木		

図4-3 屋根構造

以下の番号は柱材としてこのんで選ばれる順位にしたがっている<sup>5)</sup>。

(1) *gelaio* (*Cordia subcordata*)<sup>6)</sup>

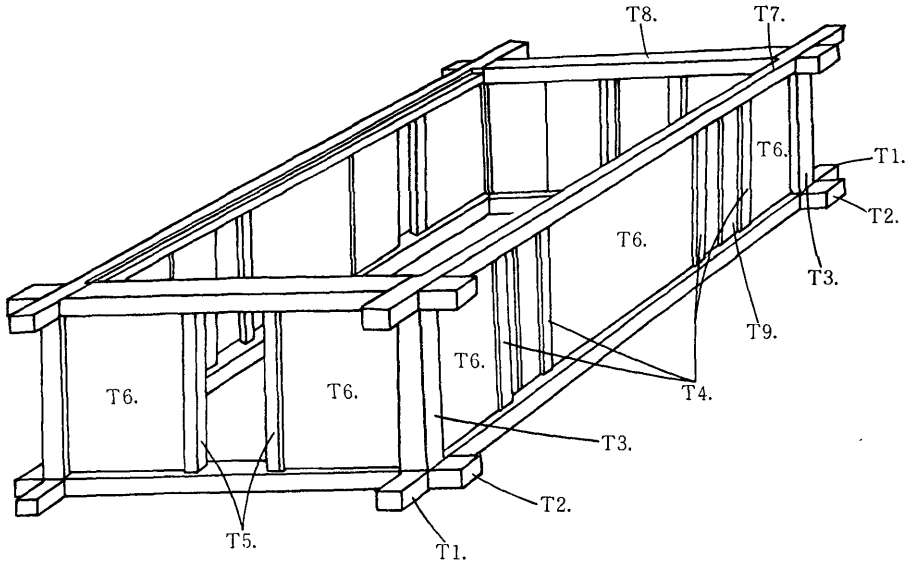
心材が黒変するぐらい成長したものが最良という。これは柱のほか垂木としてももちいられる。また、耐水性が高いのでカヌーの用材としてももちいられるとのことである。

(2) *gaingiy* (*Pemphis acidula*)

重く、固い木である。柱材としてのみもちいられる。エラートには、*gaingity* が1本しかなく、1979年夏に利用されたために、当分のあいだ伐採できる樹はない。

5) 用材の学名を同定するにあたっては、[BURROWS and SPIRO 1970] [LESSA 1977], [SOHN and TAWERILMANG 1976] を参照した。また、秋道智彌氏からも助言をいただいた。

6) 1934年エラートの西方に位置するラモトレック環礁をおとずれた染木 照は、カヌー格納庫の柱にクロガシ (*Cordia subcordata*) がもちいられ、それは直径2メートルほどあったと報告している [染木 1945: 409]。



T1. goshasash	土台（桁行）	T2. goshashtab	土台（梁間）
T3. shunnelitab	柱（四すみ）	T4. shunne	柱（桁行）
T5. shunnelipping	柱（梁間）	T6. tipaap	板壁
T7. peig	鴨居（桁行）	T8. tab	鴨居（梁間）

図5 imwtipaap の 壁 構 造

(3) yaaro (*Premna gaudichaudii*)

大木にならないので、おもにちいさな家屋の用材としてもちいられる。家屋のすべての部材としてもちいることができるが、柱材としてとくにすぐれている。

(4) uut (*Guettarda speciosa*)

固く重い木で、柱にもちいられる以外に、棟木、垂木、桁、梁にもちいられる。

(5) ragish (*Calophyllum inophyllum*)

パンノキ (mai) につづいて大木になる樹木であり、大きな材が必要なとき、これがもちいられる。耐水性が高くカヌーの船底部にもちいられる。しかし、カヌー用材としては重く、そのためパンノキを船底部にもちいるカヌーがおおくをしめる。

(6) faaliyap (*Eugenia javanica*)

固く重い木質で、棟木、桁、梁、棟束などの部材としてもちいられる。

以上のほかに家屋の構造材としてもちいられる樹木がある。それらは、柱材として



表5 家屋の部分名称

I fale および imwtegile の場合		30. 妻軒水平材	tettalipping
1. 桁	tariyelap	31. 小柱	watitit
2. 梁	goisham	32. 横木	gapangagilitit
3. 柱	siur	33. 開口部	getam
4. 棟木	ungolap	34. 引戸	giliyeseisei
5. 棟束	boot	35. 壁材	giliyepoepo
6. 垂木 (総称)	weoi	36. 床材	teppagaw
7. 両端の垂木	weoilimaat		
8. 中央の垂木	weoiluuk	II imwtipaap の場合	
9. 斜め材	itibut	T 1. 土台 (桁行)	goshaash
10. 軒桁	meleufeoiu	T 2. 土台 (梁間)	goshashtab
11. 水平材	gapangag	T 3. 柱 (四すみ)	shunnelitab
12. 第2棟木	ungoshig	T 4. 柱 (桁行)	shunne
13. 下部水平材	gappiliweoi	T 5. 柱 (梁間)	shunnelipping
14. 第2垂木	gat	T 6. 板壁	tipaap
15. そば軒	yaw	T 7. 鴨居 (桁行)	peig
16. 第3棟木	sogoram	T 8. 鴨居 (梁間)	tab
17. 平軒受部	gappiligat	T 9. 板引戸	rishig
18. 軒材	paiulmaliug	T10. 破風	teppau
19. 軒水平材 (上)	langoliyaas	T11. 棚	keilou
20. 軒水平材 (下)	gappilitettal		
21. 支持材	faib	III 仕口の名称 (imwtipaap の場合)	
22. 妻びさし垂木	weoilipping	a. 継手溝	bugobug
23. 妻びさし主材	siurung	b. ほぞ穴	ngetalishunne
24. 妻びさし支材	tibolipping	c. ほぞ	shumalishunne
25. 妻びさし支材連結材	faibaltibolipping	d. 壁の仕口	gatobolishunne
26. 妻びさし水平材	gapengagulupping	e. 壁の仕口	ngiilipaap
27. 妻軒受部	gabaorolupping	f. 鴨居の仕口	ngiilipeig
28. 妻びさし第2垂木	gattulupping	g. 鴨居の仕口	gogolaweoi
29. 妻びさし軒材	paiulmaliuglipping		

はもちいられない種類のものである。以下の番号はもちいられる頻度の高い順になっている。

(1) mai (*Artocarpus* spp.)

パンノキである。どの家屋をとりあげてもパンノキがどこかの部材にもちいられている。その理由としては、木質がやわらかく、加工しやすいということが最大の理由である。かつての大工道具は、刃物が現在のように鋼製ではなく貝製であったために、なおさら加工の容易さがもっとも重要な性質であった。また、パンノキの実が食用にされることから本数もおおく、比較的入手しやすいというこ

とも重要な点である。

(2) *lel (Morinda citrifolia)*

柱と板壁以外のすべての部材にもちいられ、虫がつきにくく、しなやかで強いとされる。

(3) *song (Bruguiera gymnorrhiza)*

太くならないが、まっすぐのびる性質をもっており、柱以外のすべての部材としてもちいられる。しかし、あまり長持しないとのことである。

(4) *falmosh (Pandanus sp.)*

柱以外の部材にもちいられる。とりわけ、十分成長したタコの木であれば、たいへんじょうぶであるという。

(5) *liu (Cocos nucifera)*

十分成長したものであれば建築用材としてもちいることができる。おもに、垂木にもちいられる。また、家屋の建築や修理のさい補助材としてもちいられる。

エラートの家屋は用材によって2つに分類される。 *tilemai* と *irawal* である。*tilemai* は柱と第2垂木以外のすべての用材がパンノキをもちいてつくられる家屋を意味し、*irawal* はパンノキをふくめて数多くの種類の用材によって構成される家屋を意味する。*tilemai* とは、*tile* と *mai* とからなる合成語で、*tile* とは *tilengi* もしくは *tittil* と同義語で「割る (板をつくる)」を意味し、*mai* はパンノキである。すなわち「パンノキを割る (そして板をつくる)」を意味している。*irawal* とは *ira* と *wal* とからなる合成語で、*ira* とは「材木」を *wal* とは「森」をあらわす。

ところで、トラック諸島においても *tinemai*<sup>7)</sup> もしくは *woomei* と *woowön* の2種の家屋があり、前者はパンノキを用材としてもちい、柱・梁・棟束・垂木などに彫刻がほどこされ装飾される [浅川 1980: 142-143; LeBar 1963: 60, 1964: 108]。エラートでは、現在ではそうした装飾をもつ家屋は存在しないが、かつてはしばしば梁などに装飾がほどこされていた [Krämer 1937: 87-88]。

エラートの場合、ふるくはすくなくとも *fale* にかぎっていえばすべて *tilemai* であった。しかし、1958年にエラートが台風直撃されたさい、*tilemai* がすべて倒壊したため、それ以後建築された家屋は例外なく *irawal* となり、*tilemai* は現存しない。

---

7) この項の表記は [LeBar 1963] による。

### Ⅲ. 家屋の類型

#### 1. 機能にもとづく類型

エラートの家屋が分棟形式をとっていることはすでにのべた。ここでは、fale と imw と mwaluumw の種類についてふれる。

##### 1) fale の場合 (写真1)

エラートにおいて fale はさまざまな用途にもちいられる。カヌーの格納庫、集会所、男の作業場、島外からの客の宿泊所、病人がでたときの病室などである。そうした用途にもちいられる fale には大きくわけて、fale (狭義) と sepal がある。

sepal とはヤップ語の sipal に由来し、ヤップの sipal は波うちぎわにたてられたカヌー格納庫をさしている。sipal へはカヌーを陸上にひきあげることなく格納することができる。また左右不同の形をしているのが特徴である [松岡 1943: 493]。エラートにおける sepal は、ヤップ島での sipal のような構造上の特徴をそなえてはいない。なお、エラートには現在 sepal は1戸しかなく、sepal は家屋名としてもちいられる。

fale と sepal を比較すると、規模の点からすれば、fale は大きく、sepal はちいさいというちがいがあある。しかし、カヌー格納庫および男の作業場としての機能においてはかわりはない。両者がことなる点は、fale が gailang もしくは bugot に所有されているのに対し、sepal は、むしろ個人が所有しているという点である。そのため



写真1 fale

に、たとえば *fale* の屋根のふきかえなどの必要が生じたとき、エラートにおけるほかの *gailang* からの協力を期待できるが、*sepal* の場合はその個人の所属する *gailang* 成員の協力しか期待できない。また、エラートに土地を所有し成員をもつ *gailang* はかならず *fale* を所有しているが、*sepal* だけを所有するということはない。その場合、たとえ規模がちいさくとも *fale* とよばれる。

いっぽう狭義の *fale* には *faltamwol* と *fennap* と *fennepaliwa* がある。*faltamwol* とは、酋長 (*tamwol*) を世襲する *gailang* の *fale* の意味で、そのほかの *gailang* の所有する *falyaramat* とは区別される。*fennap* とは、*fale* と *lap* とからなり *lap* は「おおきい」を意味する。*fennap* は規模の大きい *fale* をさすこともあるが、通常の場合エラートでもっとも地位のたかい *gailang* の所有する *fale* をさしている。すなわち、*faltamwol* をさしている。*fennepaliwa* とは *fennap* と *wa* とからなる語であり、*wa* は「カヌー」の意である。これは、エラート全体にかかわることについて集会がひらかれる *fale* をさす。なお、*faltamwol*, *fennap*, *fennepaliwa* はエラートの場合同一の *fale* のことをさしている。これらの語は、名称がもちいられる文脈によって使い分けられている。

## 2) *imw* と *mwaluumw* の場合

日常生活において一般的に、*imw* とよばれるとき、それは寝所としてもちいられる母屋をさしている。しかし、*imw* が他の語と結びついて合成語をつくるとき、さまざまな機能をもつ家屋をさすことになる。*imw* は4つのカテゴリーに区分される。すなわち、*imw* (狭義)、*imwliyalus*, *imwettemwaiu* (2種類) である。

狭義の *imw* には *imwtamwol*, *imwlap*, *imwshig* がふくまれる。*imwtamwol* とは「酋長の家」を意味し、酋長 *gailang* の所有する母屋をさしている。*imwlap* とは「大きな家」を意味し、酋長につぐ地位である *ushang* の *gailang* の所有する母屋をさす。*imwshig* とは「ちいさな家」を意味し、一般の *gailang* の所有する母屋をさす。すなわちこれらの *imw* は *gailang* の地位による類型とすることができる。

*imwliyalus* とは「*yalius* の家」を意味する。*yalius* とは、のちに詳述するが、超自然的存在を意味している。*imwliyalus* は、海岸と平行に桁行をおいて建てられ、他の家屋とは区別される。*imwliyalus* では *tauyalius* が *yalius* を祭っていたといわれる。*tauyalius* とは、神がかりになって託宣をおこなう霊能者のことであるが、その詳細は不明である。*imwliyalus* は現在ではエラートには存在しない。

*imwettemwaiu* によって総称される *imw* は、「産小屋」および「月経小屋」をさ

している。*temwau*<sup>8)</sup>とは「病気」の意である。したがって、*imwettemwau*とは「病気の家」を意味する。

「産小屋」には *imwlipal*, *imwlipeopeo*, *imwlifaamw* の3種のものがある。*imlipal* の場合 *pal* だけで「産小屋」を意味する。なお、*pal* は *fale* と同系統の語である [松岡 1943: 423]。*imwlipeopeo* の *peopeo* とは、母子が「*pal* をでたことを祝う」という意味である。*imwlifaamw* の *faamw* とは、子供を「養う」ことを意味している。出産のさい、母子は月の朔望<sup>9)</sup>につれて上記の3種の「産小屋」を移動してゆく。すなわち、臨月をむかえた女はまず *imwlipal* にはいる。そして出産後、月齢が25日目になったとき *imwlipeopeo* につわり、月があらたまり月齢の1日目に *imwlifaamw* につわり。そこで4カ月すごしたあと、すなわち新月を4回むかえたあと、はじめて母子は自分たちの *imw* にかえることが許される。

「月経小屋」には *imwttaing*, *imwligabuitag* の2種のものがある。*imwttaing* の *taing* とは「月経」を意味し、*imwttaing* とは「月経小屋」をさす。*gabuitag* という語について *ga-* は使役の接頭辞で、*buitag* とは「のぼる」を意味し、*gabuitag* とは「のぼらせる」となる。*imwttaing* から「のぼらせる」という意味である。初潮のさいには、月経がはじまるとすぐに *imwttaing* にはいり、月経後はじめてむかえた月齢1日からかぞえ、4カ月をそこですごしたのち *imwligabuitag* に移る。*imwligabuitag* では4日間すごし、自分の *imw* にもどることが許される。いっぽう、2日目以後の月経のさいには、*imwttaing* に4日間はいるとどまる。

「産小屋」「月経小屋」は三カ月状をなすエラートの両端付近に建てられていた。これらの *imw* は、出産や月経の女たちがいるため、けがれており、*taurong* たちのもつ超自然的な力を無効にするおそれがあるので、いわば隔離されていたのである。これらの *imw* の建築には、*taurong* 以外の男子たちがあたり、その構造は簡便であり、規模もちいさなものであった。なお、「産小屋」「月経小屋」は現在ではエラートには存在しない<sup>10)</sup>。

のこる *mwaluumw* は、*gailang* もしくは *bugot* を単位とする集団が共同炊事をするための小屋である (写真2)。*mwaluumw* とは、*mwal* と *uumw* とからなる語で、*mwal* とは「かくす」、*uumw* とは「石蒸し料理」もしくは「石蒸し料理用の穴」

8) *temwau* は *te-* と *mwaiu* に分解でき、*te-* とは否定を意味する接頭辞で、*mwaiu* は「よい」を意味する語である。したがって、*temwau* とは「よくない」ことを意味する。

9) 太陰暦の月は朔月を月齢1日とかぞえるが、エラートでは新月を月齢1日とし、朔月を月齢30日とかぞえる。

10) 1909年の調査によれば、エラートには3戸の *imwettemwau* が存在したことが記録されている [KRÄMER 1937: 30-31]。



写真2 mwaluumw

をさす。すなわち、「石蒸し料理用の穴をかくす小屋」が mwaluumw である。mwaluumw は桁行が海岸線と平行に建てられており、屋根構造は簡単である。

## 2. 屋根構造にもとづく類型

屋根構造<sup>11)</sup>にもとづく類型には4種類のものがある。すなわち、imwweoi, imwgat (tiwngat), imwgeffat, imwsepeig である。

imwweoi は垂木をもつものであり、機能による類型でいえば imwettemwau および mwaluumw 以外のものがこれにあたる。それにたいして、imwgat もしくは tiwngat は垂木がなく第2垂木に相当するものと水平材の樺子で小屋組がつくられる。この両者をくらべてみると、前者は後者にくらべて構造が複雑で、長期利用が可能である。それにたいして、後者は比較的簡単に建築できるが、長期間の使用に耐えない。

imwgeffat は、柱がなく屋根が直接地面にふせられたような形をしている(写真3)。geffat のうち ge- は使役の接頭辞 ga- の変化形で、ffat は「つきさす」を意味する。棟柱が直接地面につきさされているためにこのようによばれる。imwsepeig は、片屋根をもつ。sepeig は「片側」を意味する。imwgeffat と imwsepeig は小屋組については垂木をもたず、小規模で簡便な構造となっている。

なお、imwgeffat および imwsepeig の名称は、屋根構造をさすと同時に、おもに燃料であるココヤシ殻を貯蔵するための小屋をさしている。すなわち、これらの名称は、家屋の機能にもとづく類型のひとつでもある。

11) 屋根構造およびその部分名称については、図4-3を参照のこと。



写真3 imwgeffat

### 3. 壁構造と土台構造にもとづく類型 (写真4, 5, 6, 7)

fale や sepal は、カヌー格納庫や集会所、作業場として利用されるため、通常の場合壁面は設けられていない。それにたいして imw と mwaluumw の類型にふくまれる家屋には壁面が存在する。

壁の構造には、imwtepile, imwgoshash, gashiliwoshunne, imwtipaap の4種のものがあるが、基本となるのは imwtepile および imwtipaap である (図6-1, 6-2, 6-3)<sup>12)</sup>。

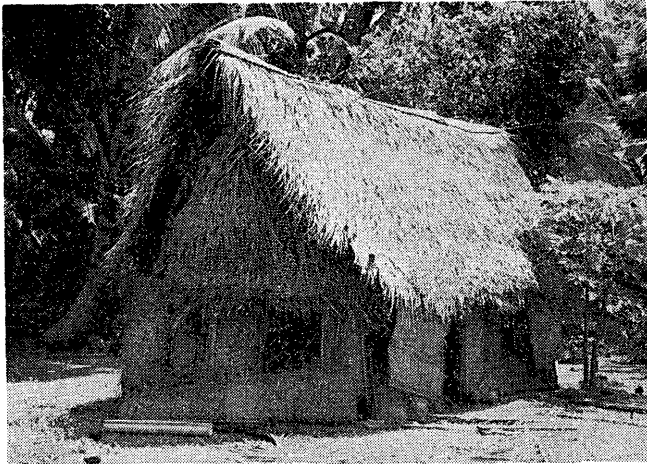


写真4 imwtepile

12) imwtipaap の構造については図5を参照のこと。



写真5 imwtipaap パンノキで板壁をつくる伝統的な様式で建てられたものである。

imwtepile についてみれば、壁面はココヤシの葉で編んだマット (giliyepoepo) でつくられている。壁を支持する小柱 (watitit) は直径5センチメートル以下のもので、屋根の重量をささえていない。壁の小柱は上端が第2垂木にしばりつけられ、下端は地面に浅く埋められている。いっぽう、imwtipaap は壁面が板でできている。tipaap とは板壁を意味する。伝統的にはパンノキを素材として一木でつくられ、板壁の厚さは7—8センチメートルほどもある。

なお、エラートでは現在のところ壁面に合板 plaiwut (plywood) をつけた imwtipaap が2戸存在する。この種類の家屋は、平面デザインにおいても特徴的であ



写真6 imwtipaap 合板で壁面がつくられている。平面型は、ヤップの家屋にて長六角形となっている。





写真7 imwgoshash

る。通常の imwtipaap は板壁でかこまれる本体が四辺形をしており妻の部分の壁は半円状にココヤシの葉のマットでふかれている。それにたいして、この場合、ヤップ島の家屋に似た六角形の平面をもっており、妻の部分はそれぞれ区切られ小室となっている。

imwgoshash は土台 goshaash をもつ家屋で、gashiliwoshunne は土台のうえに柱 (shunne) がある。この両者は、imwtegile と imwtipaap の中間型といえる。まず、いずれも柱があり、壁面が屋根の重量を支えず、壁がココヤシの葉のマットでできているという点で、imwtegile とおなじである。いっぽう、土台をもっているという点で imwtipaap とおなじである。しかし、imwgoshash には土台の四すみに柱がないが、gashiliwoshunne の場合にはそれがあるという点において両者は区別される。

以上の3類型（機能・屋根構造・壁構造および土台構造）にもとづいてエラートの家屋をまとめたものが表6である。

図6-1~3の部分名称

31. watitit	小柱	32. gapangagilitit	横木
33. getam	開口部	34. giliyeseisei	引戸
35. giliyepoepo	壁材	36. teppagaw	床材
T1. goshaash	土台（桁行）	T2. goshashtab	土台（梁間）
T3. shunnelitab	柱（四角）		

壁面の拡大図(網代編)



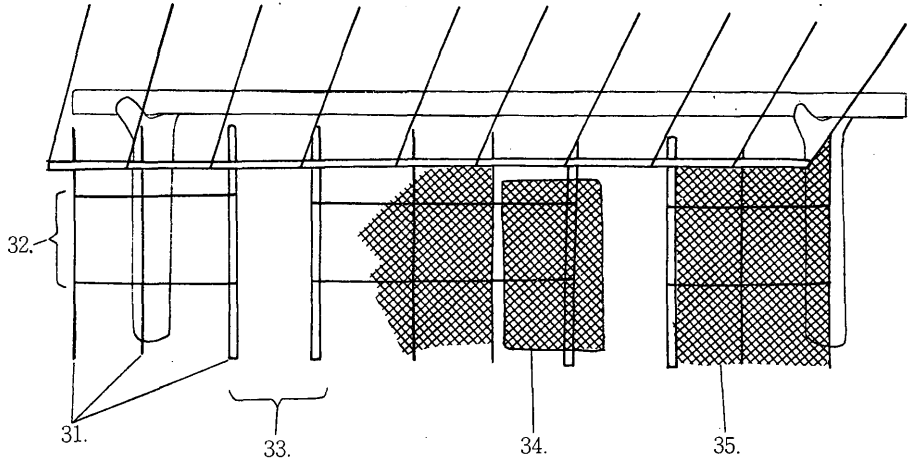


図6-1 壁の構造(1)——imwtegie の場合

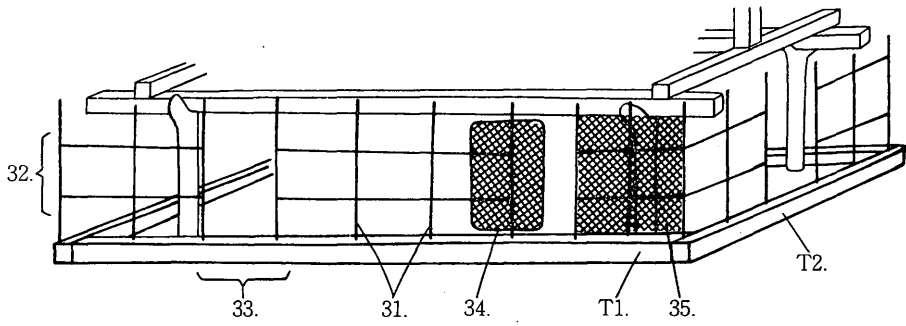


図6-2 壁の構造(2)——imwgoshash の場合

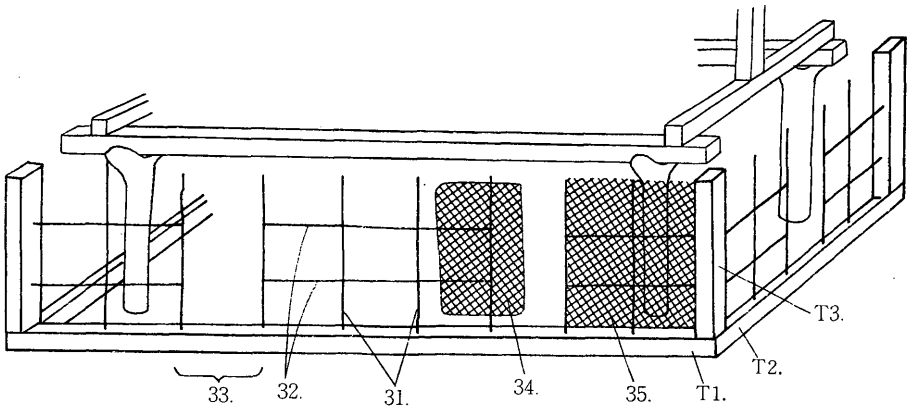


図6-3 壁の構造(3)——gashiliwoshunne の場合

表6 家 屋 の 類 型

			家根構造にもとづく類型				壁構造および土台構造にもとづく類型					
			imwweoi	imwgat	imwgeffat	imwsepeig	imwtepile	imwtipaap	imw-goshash	gashiliwo-shunne		
機 能 に も と づ く 類 型	fale	fale	faltamwol	+	-	-	-	-	-	-	-	
			falyaramat	+	-	-	-	-	-	-	-	
			fennap	+	-	-	-	-	-	-	-	
			fennepaliwa	+	-	-	-	-	-	-	-	
		sepal	+	-	-	-	-	-	-	-		
	imw	imwliyalius		+	-	-	-	-	+	-	-	
		imw	imwtamwol	+	-	-	-	±	±	±	±	
			imwlap	+	-	-	-	±	±	±	±	
			imwshig	+	-	-	-	±	±	±	±	
		imw	imwettemwau	imwlipel	-	+	-	-	+	-	-	-
				imwlipoepo	-	+	-	-	+	-	-	-
				imwlifaamw	-	+	-	-	+	-	-	-
		imw	imwettemwau	imwttaing	-	+	-	-	+	-	-	-
	imwligabuitag			-	+	-	-	+	-	-	-	
	mwaluumw			-	+	-	-	+	-	-	-	
	imwgeffat			-	-	+	-	-	-	-	-	
	imwsepeig			-	-	-	+	-	-	-	-	

## Ⅳ．家屋の建築と計測法

### 1. 建 築

家屋の建築構造について、4つの場合がある。imwtegile を建てる場合、小型の imwtegile を建てる場合、imwtipaap を建てる場合、fale を建てる場合である。

#### 1) imwtegile を建てる場合

以下にしるす番号のうち(1)から(7)は軸組をつくる過程、(8)から(21)が小屋組をつくる過程、(22)と(23)が平軒をつくる過程、(24)から(30)が妻びさしをつくる過程、(32)から(34)が妻軒をつくる過程である。

- (1) あらかじめ準備しておいた桁 (taliyelap) および梁 (goisham) を建築しようとする地面に井桁にくむ。四すみからロープをはり、対角線 (fatifatil) をおなじ長さにして柱 (siur) の位置を決定する。なお、この方法についてはのちにあらためてのべる。
- (2) 穴を掘り柱をたてる。なお、桁を受ける柱の上端は、あらかじめL字断面に整形される。この部分は yaang とよばれる。
- (3) 桁を柱にのせる。
- (4) 梁を桁にのせる。
- (5) bwau および faib<sup>13)</sup> をつかって棟木 (ungolap) をささえつつ、定位置にあげる。
- (6) 棟木の midpoint から四すみに limmatelagrag をはり、棟木の位置決めをする。これについてはのちにのべる。
- (7) 棟束 (boot) を立てる。
- (8) 両端の垂木 (weoilimaat) を4本、棟木と桁にわたしかけしぱりつける。
- (9) 中央の垂木 (weoiluug) を2本のせてしぱりつける。
- (10) のこりの垂木を等間隔でのせてしぱりつける。垂木の本数は5から13までの奇数本となっている。何本の垂木をもうけるかについては、家屋の規模しだいできめられる。この点についてはのちにくわしくのべる。
- (11) 斜め材 (itibut) を屋内から垂木にしぱりつける。
- (12) 軒桁 (meleufeoiu) を軒先で垂木にしぱりつける。
- (13) limmatelagrag をはずす。
- (14) 垂木に水平材 (gapangag) をしぱりつける。水平材の本数は家屋の規模により

13) bwau および faib については rongolibaang にもちいられる補助材の項を参照のこと。

不定であるが水平材と第2垂木 (gat) とでつくる四辺形は、人間が通りぬけられる程度の大きさが必要であるとされる。柱が倒れ屋根の下に人間がとじこめられたとき屋根材をやぶって脱出するためである。

- (15) 両側の垂木が交叉するところに第2棟木 (ungoshig) をのせ、しばりつける。
- (16) 水平材のうちもっとも下の位置に、下部水平材 (gappiliweoi) をしばる。
- (17) 水平材の妻側の両端に、そば軒 (yaw) をしばりつける。これは水平材の上下に

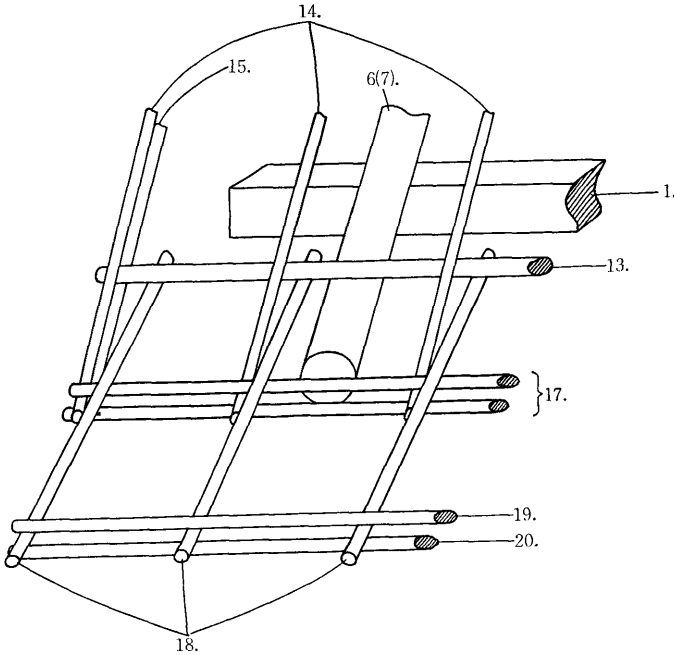


図7-1 平 軒 部 分

- |                   |       |
|-------------------|-------|
| 1. taliyelap      | 桁     |
| 3. siur           | 柱     |
| 6(7). weoilimaat  | 両端の垂木 |
| 13. gappiliweoi   | 下部水平材 |
| 14. gat           | 第2垂木  |
| 15. yaw           | そば軒   |
| 17. gappiligat    | 平軒受部  |
| 18. paiulmaliug   | 軒材    |
| 19. langoliyaas   | 軒水平材  |
| 20. gappilitettal | 軒水平材  |

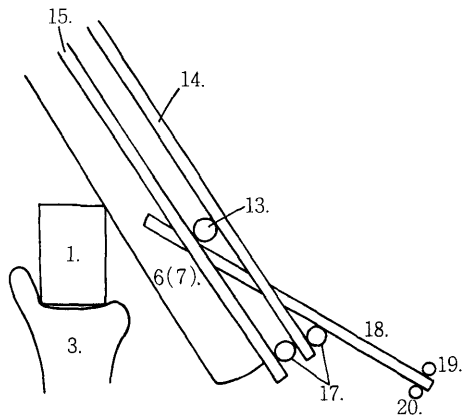
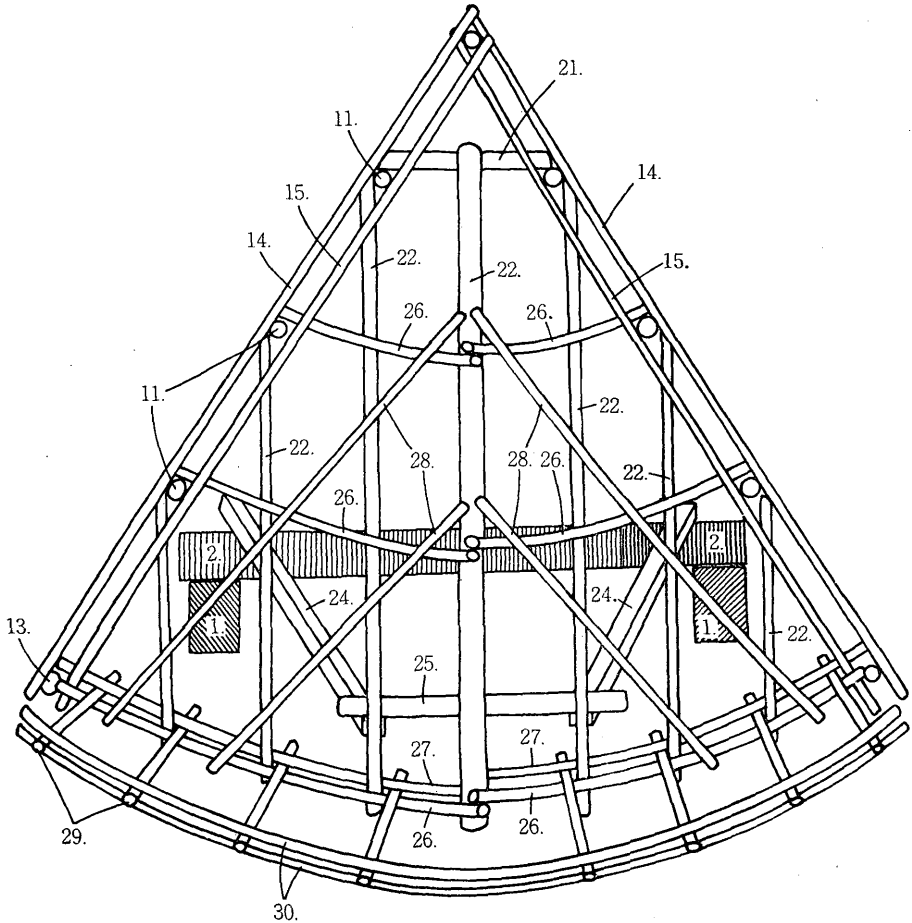


図7-2 平軒部分(断面図)

とりつけられる。

- (18) 第2垂木を水平材のうちに等間隔でしばりつける (14を参照)。
- (19) 第2垂木の上に第3棟木 (sogoram) をのせる。
- (20) 軒先で第2垂木を上下からはさみこむ平軒受部 (gappiligat) をしばりつける。
- (21) 上から2番目の水平材 (両屋根とも) と棟束をむすんで支持材 (faib) をしばりつ



1. taliyelap	桁	2. goisham	梁
11. gapangag	水平材	13. gappiliweoi	最下部水平材
14. gat	第2垂木	15. yaw	そば軒
22. weoilipping	妻びさし垂木	24. tibolipping	妻びさし支材
25. faibaltibolipping	妻びさし支材連絡材	26. gapangagulipping	妻びさし水平材
27. gabaorolpping	妻軒受部	28. gattulipping	妻びさし第2垂木
29. paiulmaiuglipping	妻びさし軒材	30. tettalipping	妻びさし水平材

図8 妻 び さ し

- ける。また、中央の垂木と上から2番目の水平材がまじわる位置に支持材をわたしかけ、しばりつける。
- (24) 第2垂木ごとにそえて軒材 (paulmaliug) をさしこむ。これは平軒受部の上から下部水平材の下にむけてさしこみ、平軒受部にしばりつける (図7-1, 7-2)。
- (25) 軒材の最先端の上下に軒水平材(上) (langoliyaas) と軒水平材(下) (gappilitettal) をしばりつける。
- (26) 妻びさし (pping) 側からみて、両屋根の最高部の水平材に支持材 (faib) をわたしかけ、水平材にしばりつける (図8) (写真8)。
- (27) 妻びさし垂木 (weoilipping) を支持材の中央にしばりつける。なお、妻びさし垂木を地面にまでのばし通し柱のようにする場合、これを妻びさし主材 (siurung) とよぶ。ただし fale の場合、カヌーを妻側から搬入するために妻びさし主材はもうけられず、かならず妻びさし垂木がもうけられる。
- (28) 屋内から妻びさし支材 (tibolipping) を2本はりだす。これは梁の上におかれ、端は桁にしばられている。
- (29) 妻びさし支材の先に妻びさし支材連結材 (faibaltibolipping) をしばりつけ、2本の妻びさし支材をむすびつける。
- (30) さきほどの妻びさし垂木と妻びさし支材連結材をしばりつける。

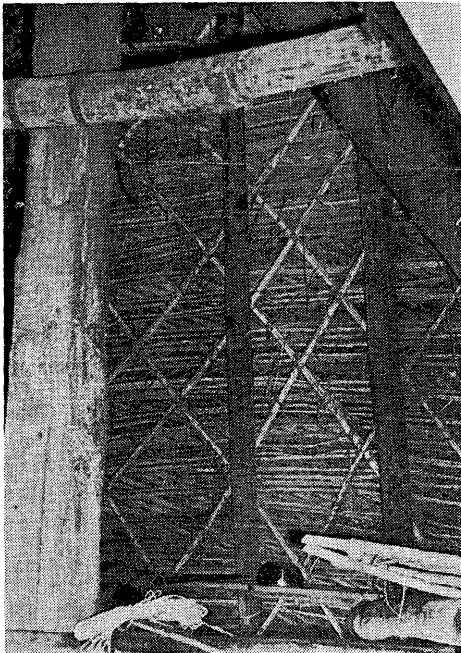


写真8 妻びさしの内側。写真中右側下方からのびているのは妻びさし支材である。この家屋の場合、妻びさし水平材が二重にとりつけられている。

- ⑳ 中央の妻びさし垂木と平行に、両屋根の各水平材から妻びさし垂木を垂直におろす。
- ㉑ 地面と平行に、もしくは屋根の傾斜と平行に妻びさし水平材(gapengagulupping)をとりつけ、妻びさし垂木にしばりつける。
- ㉒ 妻びさし第2垂木(gattulupping)を妻びさし水平材にしばりつける。
- ㉓ 妻軒受部(gabaorolupping)を最下部の妻びさし水平材の裏側(屋内側)にしばりつける。
- ㉔ 妻びさし水平材の上を通し、そのすぐ上の妻軒受部の下に妻びさし軒材(paiul-maliugilipping)をさしこむ。
- ㉕ 妻びさし軒材の最先端の上下に妻軒水平材(tettalipping)をしばりつける。

以上で構造部分の建築が完了し、このあとココヤシの葉で編んだ屋根材(yaas)で屋根をふき、そのあと壁面を完成させる。その過程はのちにのべる。

## 2) 小規模な imwtegile を建てる場合 (写真9-1~9)

imwtegile の場合と基本的には同一であるが、ことなっている点はまず(3)から(9)までの作業を地面の上でおこない、そのあと屋根を人手であらかじめたてておいた柱の上にかつぎあげ、のこる作業をつづけるという点である。

## 3) imwtipaap を建てる場合

- (1) 土台(桁行)(goshaash)をおく。imwtegile の場合とちがいが、ただ地面におかれる<sup>14)</sup>。
- (2) その上に土台(梁間)(goshashtab)をおき、組みあわせる。
- (3) 2組の土台がまじわる四すみに小柱(chunnelitab)をたてる(図9-1, 9-2)。
- (4) 土台(桁行)の上の戸柱(chunne)を立てる(計8本)。出入口は、桁行に2カ所ずつもうけられる。
- (5) 土台(梁間)の上の戸柱(chunnelipping)を立てる(計4本)。出入口は、梁間の中央に1カ所ずつもうけられる。
- (6) 板壁をいれる(図9-3)。
- (7) 板引戸(rishig)をいれる。
- (8) 鴨居(桁行)(peig)をのせる。これはL字の断面をもっている。
- (9) 鴨居(梁間)(taab)をのせる。

14) imwtipaap の構造については図5を参照のこと。



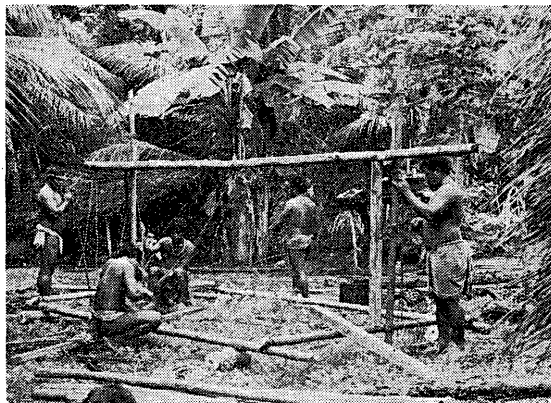
写真9 小規模な imwtegile の建築過程。



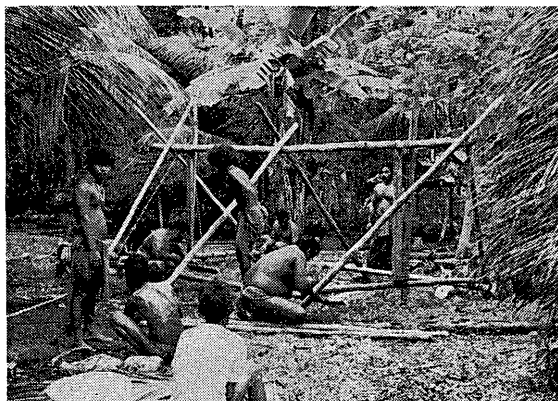
1. 桁と梁を組みあわせてしぼり四辺形をつくる。



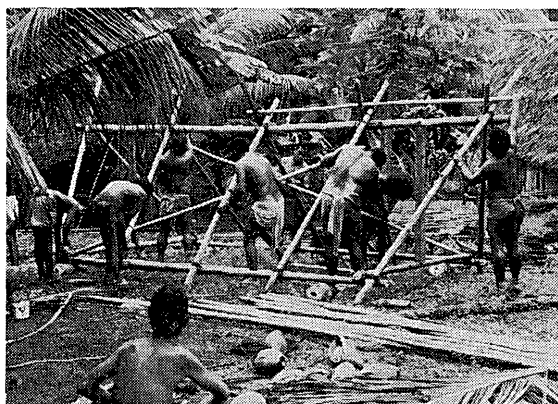
2. bwau をつかって棟木を所定の位置にあげる。



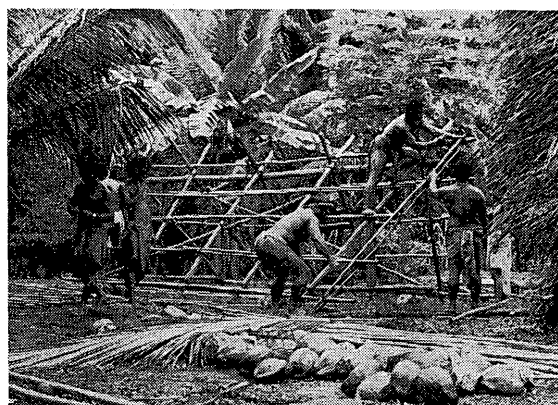
3. 棟束をたてる。



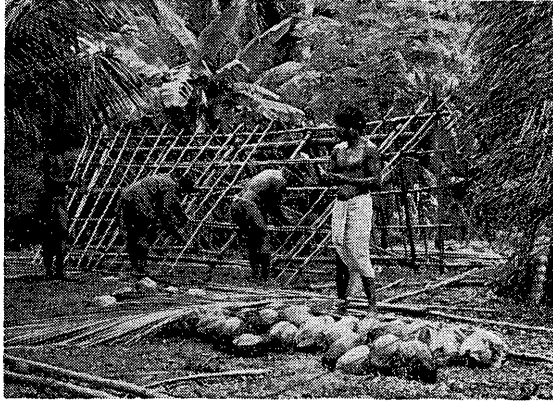
4. 中央と両端の垂木をしばりつける。



5. のこる垂木, および斜め材, 第2棟木をしばりつける。



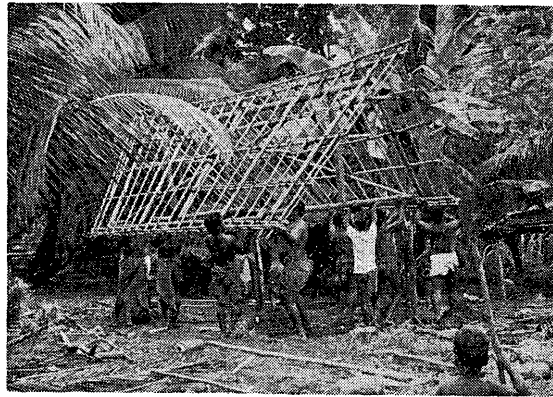
6. 水平材およびそば軒をとりつける。



7. 第2垂木を等間隔にしばりつける。



8. 第3棟木をしばりつけ、屋根の部分が完成する。



9. 屋根全体を多勢でかつぎあげ、あらかじめたててあった柱のうえにのせる。このち、屋根ふきにかかる。

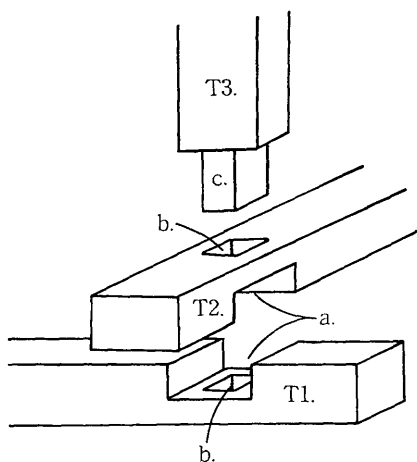


図9-1 仕口(1)

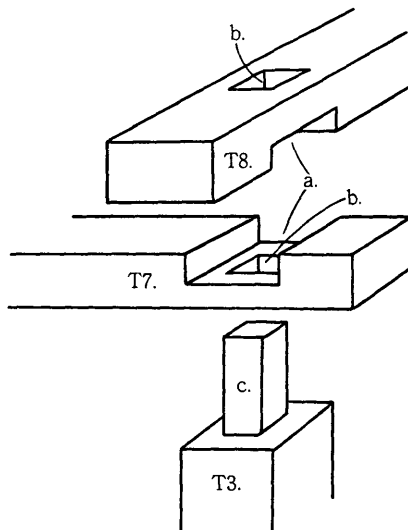


図9-2 仕口(2)

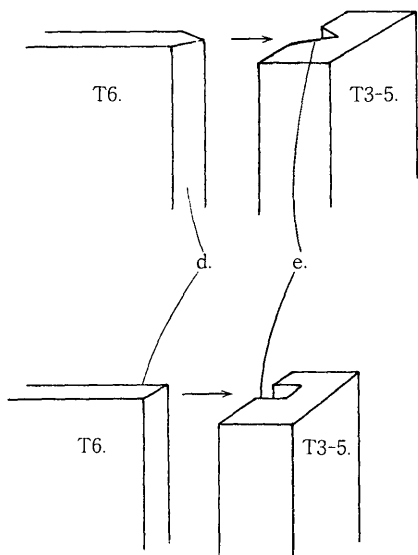


図9-3 仕口(3)

- |                   |        |
|-------------------|--------|
| T1. goshash       | 土台(桁行) |
| T2. goshashtab    | 土台(梁間) |
| T3. shunnelitab   | 柱(四すみ) |
| T4. shunne        | 柱(桁行)  |
| T5. shunnelipping | 柱(梁間)  |
| T6. tipaap        | 板壁     |
| T7. peig          | 鴨居(桁行) |
| T8. tab           | 鴨居(梁間) |
| a. bugobug        | 継手溝    |
| b. ngetalishunne  | ほぞ穴    |
| c. shumalishunne  | ほぞ     |
| d. gatabolishunne | 壁の仕口   |
| e. ngilipaap      | 壁の仕口   |

以下は, fale および imwtepile の場合における(5)以下の手順と同一である。ただし, fale または imwtepile の場合, 垂木は桁の上ののせ, しばりつけられるのに対して, この場合, 鴨居(桁行)のL字断面にはめこまれる(図10-1)。小屋組, 妻びさしの作業がおわったのち, 破風(teppau) および棚(keilou) がつけられる(図10-2)。

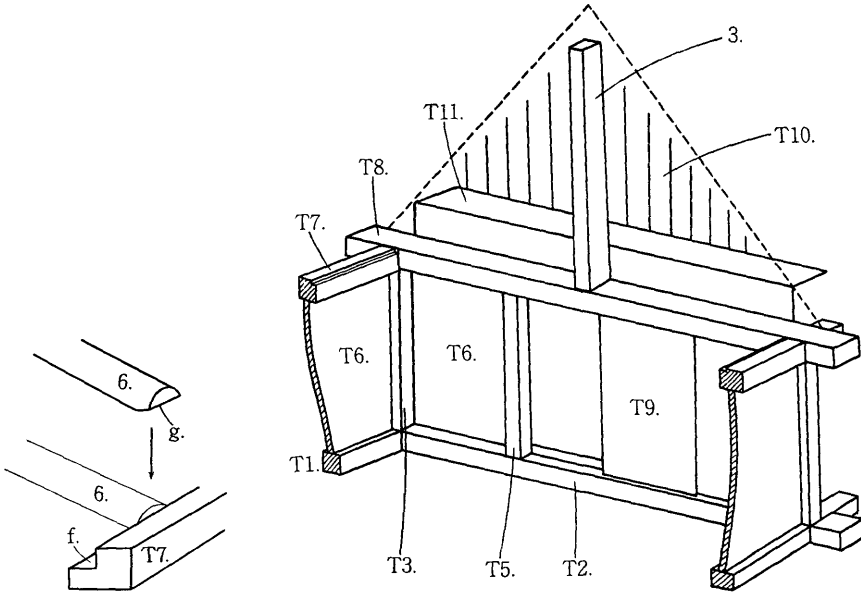


図10-1 仕口(4)

- 3. boot
- T1. goshaash
- T3. shunnelitab
- T6. tipaap
- T8. tab
- T10. teppau
- f. ngiilipeig

- 棟束
- 土台(桁行)
- 柱(四角)
- 板壁
- 鴨居(梁間)
- 破風
- 鴨居の仕口

図10-2 破風の構造

- 6. weoi
- T2. goshashtab
- T5. shunnelipping
- T7. peig
- T9. rishing
- T11. keilou
- g. gogolalweoi
- 垂木
- 土台(梁間)
- 柱(梁間)
- 鴨居(桁行)
- 板引戸
- 棚
- 鴨居の仕口

4) fale を建てる場合 (写真10)

基本的には imwtegile の場合と同一である。ただし、(22)と(23)の平軒をつくる過程、および(32)から(34)の妻軒をつくる過程が不要である。また、壁面はもうけられない。

5) 屋根ふき

屋根をふく作業は, fatefat とよばれる。家屋材 (yaas) としては, 枯れたココヤシの葉をもちい, その根元および先端を切りすて, のこる部分を網代編みにしたものである。のちへのべるが, 屋根材の長さはまちまちで, したがって屋根の規模によりことなる。なお, 屋根全体もまた yaas とよばれる。

屋根材は, ハイビスカス (gilifo: *Hibiscus tiliaceus*) の樹皮をさいてつくったヒモ (fa) をもちいて, それぞれの屋根材を桁行方向に前後をすこしづつ重ね, 第2垂木にしぱりつけられる。

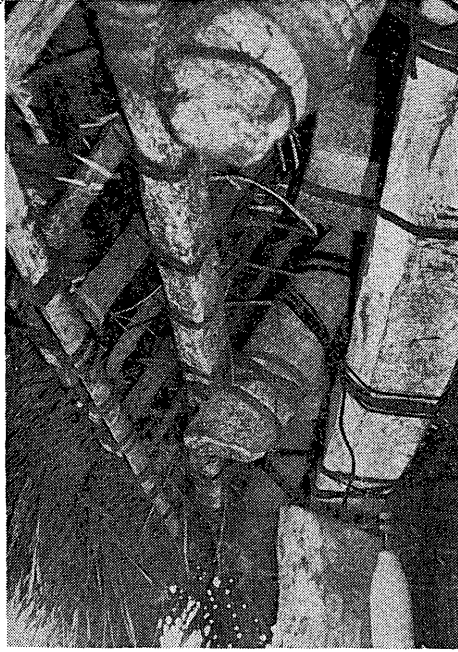


写真10 fale の軒先

屋根材は表と裏とが区別されており、ふつうココヤシの葉の表を外にむけてふかれるが、屋根の棟 (ung) の部分では、ココヤシの葉の裏が外にむくようふかれる。また、屋根をふくさい切妻屋根の妻側の端には、かならず屋根材のシンとなっているココヤシの葉軸の根元側がくるようにふかれる。したがって、屋根材には、むかって左に葉軸の根元のくるものと右にくるものの2種類があることになる。

- (1) 軒先にしぼりつけられる屋根材は、男たちが地上に立ってしぼりつける。第一列の屋根材をしぼりおえたところで男たちは屋根の上にあがる。屋根材は、第2垂木にしぼりつけられる。屋根をふくには、水平材を足がかりにして、前かがみになっておこなわれる。一人の男で数カ所の結び目を担当し、おおぜいの男たちがならんで屋根をふく(写真11)。
- (2) 屋根材は一列づつ順にしぼられてゆく。屋根材をしぼる位置がたかくなると屋根材を投げあげなければならない。
- (3) 屋根材を第3棟木のたかさ付近の位置までしぼったのち、のこる片屋根の第一列をしぼりはじめる<sup>15)</sup>。
- (4) (3)と同様の過程がくりかえされ、両屋根ともにおなじたかさまで屋根材がしぼりつけられると、つぎの屋根材は両屋根とも第2垂木ではなく第3棟木にしぼりつ

15) 新築のさい、両屋根のどちら側かの屋根を疎にふき、屋根のいたむ時期を早めるようにする。両屋根を同時にふきかえないためである。なお、屋根材の耐用年数は2-3年である。



写真11 屋根ふき。屋根材は、一列づつ順にふかれる。

けられる。

- (5) choppat とよぶヒモを第2棟木の下に通す。choppat を通す位置は第2垂木ごとである。choppat は fa より巾がひろく長いもので、2本いっしょに通される。
- (6) 屋根材を裏がえしにしてもちい、棟の部分で両屋根の部分が重なるように2本の choppat のうちの1本をつかってしばりつける。
- (7) (6)の過程をもういちどくりかえす。のこる choppat をつけてしばりつける。
- (8) さいごに ungoipigipig をのせ toutou とよばれる細い棒で第3棟木と第2棟木のあいだを通して ungoipigipig を突き刺し、固定する(図11)。ungoipigipig は、ココヤシの葉を切りおとしてココヤシの小葉を軸部からひきさき、その結果できる

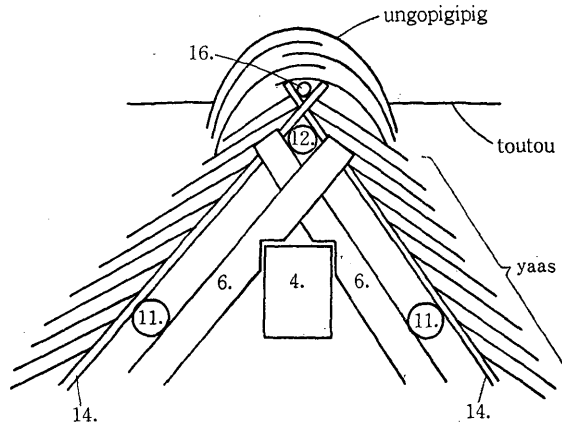


図11 棟のふきかた

1組（2枚）のココヤシの小葉と、別に用意したココヤシの葉を網代編みしてつくられる。つまり *ungopigipig* はつごう2枚のココヤシの葉をつかって編まれている。このとき、屋根材とちがいココヤシの葉の先端部分を切りおとさず、編まずにおく。ところで、*ungopigipig* は *ung*「棟」と *pigipig*「たたく」とからなる語で、「棟をたたく」の意である。すなわち、この先端部分が風でなびき、「棟をたたく」わけである<sup>16)</sup>。

(9) 妻びさしをふく。妻びさしは円錐状で曲面になっている。通常の屋根材では柔軟性がなく、曲面にあわせてまげることができない。そこで、*ungopigipig* をつくるさいとおなじくココヤシの小葉を軸部からひきさき、2枚とれる小葉の部分の部分を別べつに屋根材とおなじく網代編みで編み、2枚を重ねて妻びさし斜め材もしくは妻びさし垂木にしばりつける。妻びさしは垂直に近いので、屋根材は屋内からしばりつけられる。

#### 6) 壁づくり *imwtegile* の場合<sup>17)</sup>

- (1) 4本の柱がつくる平面よりやや広い平面をかこむように、等間隔に小柱 (*watitit*) がたてられる。妻の部分は半円状に小柱がたてられる。小柱には、直径5センチメートルばかりのまっすぐな用材<sup>18)</sup>をもちい、その基部はあさく地面に突きさされ、上部はふつう第2垂木にしばりつけられる。
- (2) 平側に片面2カ所づつの開口部 (*getam*) をのぞき、小柱に横木 (*gapangalitit*) をしばりつける。小柱と横木がつくる四辺形はほぼ正方形になるよう横木の本数が加減される。
- (3) ココヤシの葉を網代編みにしたものを壁材 (*giliyepoeco*) として小柱や横木にしばりつける。

## 2. 計 測 法

エラートにおける家屋の計測法の基本は、家屋を建築するさいの主要部分の位置ぎめおよび主要部材の長さの相対比を算定することにある。そのさい基本となるのは二

16) *ungopigipig* は建築がおこなわれた季節の卓越風とは反対側の棟の先からふきはじめる。棟の先には *ungopigipig* のうち、ココヤシの葉軸の根元にあたる側がむけられる。順に重ねながらふいてゆき、最後の一枚をそれまでとは逆に卓越風に葉軸の根元をむけるようにふく。エラートでは、雨が多く、パンノキの実がみのる夏の季節を *lecheg* とよび、この季節には南西からの風が卓越する。乾期でパンノキの実がみのらない冬の季節を *yefang* とよび、この季節は東もしくは北東からの風が卓越する。なお、エラートの家屋のうち、通常のは、妻側を海岸線にむけているのであるが、それは季節風の吹く方向と平行に棟がむけられているということでもある。

17) *imwtegile* の壁の構造および部分名称については図6-1を参照のこと。

18) 小柱や横木には *song* (*Bruguiera gymorrhiza*) がもちいられることがおおい。



等分法である [ALKIRE 1970: 19–23, 68–69; BURROWS and SPIRO 1953: 20, 75; LeBAR 1963: 62, 1964: 131–132]。

二等分は、ある長さの部材にココヤシロープをあてロープを二等分し、えられた二等分点（中点）を部材にするすことでえられる。「中点」（2分の1）は *luug*, 「4分の1」点は *lugolitab*, 「8分の1」点は *lugolipeig*, 「16分の1」点および「32分の1」点は *galus* とよばれる。なお、二等分法およびそれにまつわる2の倍数がマイクロネシア社会にとって重要な意味をになっているという点については、すでにいくつかの報告がみられる [秋道 1980a; ALKIRE 1970, 1972; 石森 1979]。

### 1) 家屋の規模の決定

家屋の規模を規定するのは桁行の長さである。家屋を建築するさい依頼者は、*imw* であればそこに居住する人数、*fale* であればそこに格納するカヌーの大きさを考慮にいれ、家屋の大きさを桁行の長さで表現して、両手を左右に広げたときの両指間の長さ（尋 *ngaf*）でいくつと指定する<sup>19)</sup>。

ところで、トラック諸島における家屋の規模は、屋根ユニットを桁行方向に何枚ならべるかによって表示される<sup>20)</sup> [LeBAR 1963: 64–65; 浅川 1980: 147]。トラック諸島の屋根材はゾウゲヤシの葉でつくられ1尋がその長さである [浅川 1980: 144–146]。つまり、屋根材が規格化されているわけである。しかし、エラートでは先のべたように、枯れたココヤシの葉を編んで屋根材とする。利用されるココヤシの葉の長さはまちまちであり規格化されていない。それゆえ、エラートでは、屋根材の枚数によって家屋の規模を表示するというトラック方式をもちいることができない。むしろ身体部位をもちいた表示によって桁行の長さを示すわけである。桁行の長さは、そのほかの部材の長さを決定するさいの基準となり、ひいては家屋の大きさを決定することになる。

### 2) 梁間と桁行の比

梁間は *shoilapal* とよばれ、桁行は *erail* とよばれる。梁間は桁行との比によって長さが決定される。なお、部材の名称でいえば、梁間は梁 (*goisham*)、桁行は桁 (*taliyelap*) にあたる。

エラートでは梁の長さは、桁の長さの8分の3から8分の5の長さであることが望

19) これと同じ方法はウォレアイ環礁でもおこなわれる [ALKIRE 1970: 19]。

20) F. LeBar によれば、屋根ユニットの枚数は「指」の本数をあらわす助数詞 (-*ayt*) をもちいて表示される [LeBAR 1963: 64–65] が、浅川によれば、屋根ユニットの枚数をあらわす助数詞は、「指」をあらわす *öt* ではなく「列」をあらわす *auöt* であるとのことである。たとえば、*fuauöt* (7列) のようにもちいられる [浅川 1980: 147]。

ましいとされる。8分の3および8分の5の長さは、二等分法によってえられる。すなわち、まず用意した桁にロープをあて、その長さをうつつしとる。ついで、そのロープを二分し、中点 luug をわりだす。この過程をあと2回くりかえし、つごう3回二等分法をおこなえば8分の1の長さをみちびくことができる。この8分の1の3倍、5倍がそれぞれ8分の3、8分の5の長さということになる。

エラートに現存する家屋の寸法から梁間と桁行の比を算出する(表7)。この比をここでは縦横比とよぶ。これは梁間の値を桁行の値で除したもので、桁行を1として算出した比である。縦横比は、平均0.59、最大値0.83、最少値0.35で分布しており、縦横比の理想値8分の3(0.38)から8分の5(0.63)の値をふくみこんでいる。縦横比を算出するにあたって対象とした22戸の家屋のうち、13戸がこの理想値にふくまれ、1戸が理想値をしたまわるほか、のこる8戸が理想値をうわまわっている。すなわち、現実の家屋の約6割は理想値内にふくまれるものの、理想値にくらべて家屋の

表7 縦横比・高さ比

家屋番号	家屋名	縦横比	高さ比
1.	Latowa	0.78	0.83
3.	Gasuereol (Libolirang)	0.46	0.79
4.	Geleisiya	0.54	0.73
6.	Welipiy	0.69	0.93
8.	Metaar	0.48	0.94
10.	Fasseour	0.56	0.83
11.	Lugal	0.66	0.79
13.	Gatiyafash	0.63	0.76
14.	Wolippar (Weligeshushu)	0.63	0.93
15.	Maifash	0.5	0.72
17.	Rugulong	0.83	0.87
18.	Gateopalei	0.60	0.65
19.	Fassefang	0.71	0.76
20.	Faliyap	0.4	0.87
22.	Lugeriya	0.35	0.88
24.	Gatierang	0.71	0.68
25.	Faligilyaw	0.56	0.82
28.	Lmeoluw	0.65	0.92
29.	Lmeoluw	0.38	0.82
30.	Imwepeo	0.73	0.92
32.	Salingeluw	0.49	0.69
33.	Gatiyafash	0.56	0.69

rongの対象外の mwaluumw および sepal は除外してある。

平面形が正方形に近いものが多いことがわかる<sup>21)</sup>。

### 3) 梁間と棟高の比

この比は、梁と棟束の長さの比によってもとめられる。これをここでは「高さ比」とよぶことにする。棟束の長さを梁の長さで除して、梁の長さを1とおいたときの棟束の長さをあらわす値である。

エラートにおいては、高さ比について、2通りの数値がある。ひとつは、32分の25から8分の7までの比をもつもので、のこりは、8分の7から16分の15までの比をもつものである。前者が *imwshig*, *falyaramat* の高さ比であるのたいし、後者は先にのべた *imwtamwol*, *faltamwol* の高さ比である。したがって、高さ比は地位の差を表示していることになる。

エラートに現存する家屋の高さ比を算出する(表7)。それによれば、高さ比は、平均0.81、最大値0.94、最小値0.65の値で分布している。高さ比の理想値にふくまれる家屋は、22戸中14戸であり、6割強の家屋がふくまれている。のこる8戸はすべて理想値をしたまわっている。理想値は、先にのべたように8分の7(0.88)を境に二分される。0.88以上の数値をもつ家屋は8戸ある。8戸の家屋のうち家屋名でいえば0.94の高さ比をもつ *Metaar* および0.93の *Wolipar* は元酋長 *gailang*<sup>22)</sup> の *Saufalashig* の所有家屋であった。のこる *Wolipiy*, *Rugulong*, *Faliyap*, *Lemeoluw*, *Imwpeo* はすべて、現酋長 *gailang* の *Sauwel* の所有となっている。したがって、0.88以上の高さ比をもつ家屋はすべて例外なく、*imwtamwol* もしくは *faltamwol* ということができる。

W. Alkireによればウォレアイ環礁における梁(*guisham*)<sup>23)</sup>と棟束(*bwot*)の比が、通常の家屋(*imaliaramat*)では2対1すなわち0.5であり、酋長の家屋(*imalitamol*)においては4対3すなわち0.75、葬屋(*imalipei*)もしくはカミの家(*imaliyalus*)では8対7すなわち0.88と報告している [ALKIRE 1970: 20]。

そのほか、エラート周辺の島じまの家屋の高さ比に関するデータを比較するとつ

21) サタフル島における家屋の縦横比の理想値は、0.5(梁は桁の2分の1)とのことである [須藤 1980b: 178]。

22) 現在、エラートの酋長は *Sauwel gailang* からでているが、伝統的には *Saufalashig gailang* からでることになっていた。しかし、前酋長でその血統が絶えたために、酋長位は、酋長につぐ地位の *ushang* の地位にあった *Sauwel* の者が酋長になった。しかし、酋長位の継承については、現酋長が正統の酋長ではないので今後流動的である。

なお、現在、エラートには *Saufalashig* の成員が存在するが、これは別系統の *Saufalashig* であり、酋長位をつぐことはできない。

23) この項の表記は Alkire [1970] による。本稿の表記はつぎのごとくである。 *guisham*→*goisham*, *imaliaramat*→*imwliyaramat*, *imalitamaol*→*imwlitamwol*, *imalipei*→?, *imaliyalus*→*imwliyalus*。

ぎのごとくとなる。サタワル島における高さ比は8分の5ないし16分の9を理想とする [須藤 1980b: 179]。ポナベ・パラオ・ヤップ各島の集会所の屋根の傾斜角は60度であるのたいし、トラック諸島トル島のウトは30度となっている [浅川 1980: 170]。プルスク島における屋根の傾斜角は45度である [中村 1977: 584]。それぞれを本稿の高さ比に換算すると、サタワルのそれが0.63から0.56、ポナベ・パラオ・ヤップが0.87、トラックが0.29、プルスクが0.5という数値になる (表8)。これらの数値を単純に比較してみるとポナベ・パラオ・ヤップを別にして、トラックのそれを最低として西にゆくほどその値が高くなっている。

表8 高さ比の比較

ポナベ	0.87
トラック	0.29
プルスク	0.5
サタワル	0.63-0.56
	0.78-0.88
エラート	0.88-0.94
	0.5
ウォレアイ	0.75
	0.88
ヤップ	0.87
パラオ	0.87

注) ポナベ・トラック・ヤップ・パラオの各島については浅川 [1980: 170], プルスク島については中村 [1977: 584], サタワル島については須藤 [1980b: 179], ウォレアイ環礁については Alkire [1970: 20] をもとに作成。

なお、高さ比の機能的な説明として、屋根の傾斜角が大きいほど、つまり高さ比が大きいほど雨がもりにくく、屋根が長もちするといわれる。この問題については、水はけと風との関係にもとめられる。すなわち、水はけをよくするために屋根の傾斜角をすどくするが、風あたりからすれば、傾斜角をすどくするわけにはいかないわけである [浅川 1980: 170; 須藤 1980b: 179]。

#### 4) 棟木と桁の長さ

棟木は桁よりも長くなければならないとされる。すなわち、棟木が桁よりつきでたいわゆる舟形屋根をつくるためである。

棟木の長さの決定には、エラートではこれまでの例のような具体的な計測法もっていない。ウォレアイ環礁の家屋の棟木の長さは桁の両端からそれぞれヒジから指先までの長さずつ長くなるよう測られる [Alkire 1970: 20]。そのほかサタワル島では、棟木の長さは桁の長さよりも一尋長くとられる [須藤 1980b: 178]。

エラートにおける棟木が桁よりも長いという点の機能的な説明としては、妻びさしをつくる空間のためにも棟木はつきだしていなければならないといわれる。もし棟木で十分な長さをとることができなければ、第2棟木をつきださせて第2垂木を妻側にかたむけることによって解決することもできるとのことである。

5) 柱の位置の決定

家屋を建てようとする地面に、梁と桁で井桁をくむ。四すみから対角線にロープをはり、両対角線が等しい長さになるよう井桁を調節する。対角線を測定することを gapofatil といい、2本の対角線を測定することを gapofatifatil という。gapo は「測る」であり、fatil は「対角線」、fatifatil は「2本の対角線」をそれぞれ意味する。なお、サタワル島では、柱の位置は、井桁を組んだ梁と桁のむかいあう長さが等しいこと、対角線の長さが等しいことを確認することによりえられる [須藤 1980b: 180]。

6) 棟木の位置の決定

棟木が妻側に等しい長さにつきできるようにする方法である。棟木の中点に4本の等しい長さのロープをむすびつけ、ロープの先を柱にあて、棟木の位置を調節する。このロープは limmatelagrag とよばれ、ある種のヒトデの名前とのことである。

7) 垂木の間隔

垂木の本数には家屋の大きさにより、5, 7, 9, 11, 13本の5種のものがある。なお、現存するものでは7本が最大である。

計測法の基本である二等分法をもちいて垂木の間隔を決定する場合、垂木の本数が5, 9本のさいには容易にその位置を決定できる。しかし、7, 11, 13本の場合には、単純に二等分法をもちいるだけではその位置を決定することができない。エラートでの聞きとりでは、人びとはみればわかるというだけで、具体的な方法を聞きとること

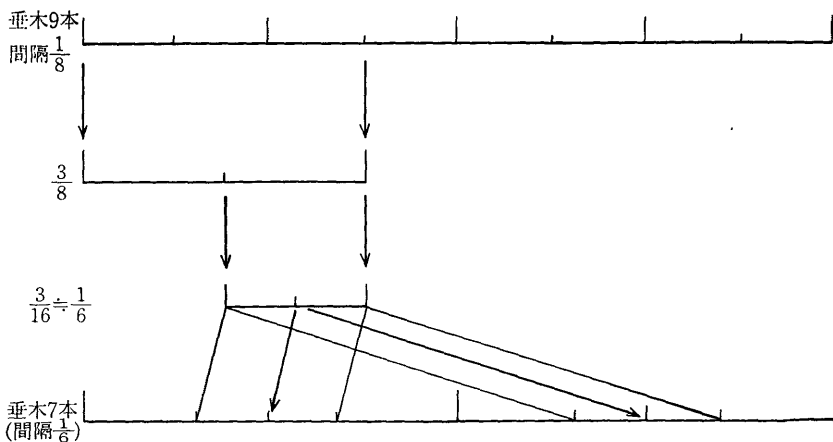


図12 二等分法による垂木間隔の決定（垂木7本の場合）  
注) [ALKIRE 1970: 21-22] をもとに作図。

ができなかった。

ところで、W. Alkire は垂木 7 本の場合に二等分法のみでその間隔をわりだす方法についてウォレアイ環礁における事例を報告している [ALKIRE 1970: 21-22]。それはつぎのとおりである。家大工はまず用意していた桁の上に 9 本の垂木をおくと仮定して 9 カ所の印をつける (両端をふくむ)。すなわち二等分法を 3 回くりかえして、8 等分の箇所それぞれ 1 本ずつ 9 本の垂木をおくと仮定する。つづいて、この目盛で 8 分の 3 の長さをはかり、これを 2 等分する。すると 16 分の 3 ができる。この長さをさらに 2 等分しその「中点」を 9 本の垂木をおくと仮定した桁の「4 分の 1」点にあて 16 分の 3 の長さの箇所に印をつける (図 12)。つまり、本来 7 本の垂木をおくとするとその間隔は所定の桁の 6 分の 1 であるはずであるが、その 6 分の 1 の値を 16 分の 3 で近似させようというわけである。

## V. 家屋の修復の知識と技術

### 1. 三種類の baang

「家屋修復の伝統的知識」である *rongolibbang* は、かならずしも家屋修復に関する知識だけを意味しない。じつは 3 種類の *rongolibaang* が存在する。3 種類の *rongolibaang* とは、*bangiwa*, *bangifal*, *bangiyaramat* である。

*bangiwa* とは、*wa* の *baang* の意である。*wa* は「カヌー」を意味し、カヌーが洋上で転覆したさい、それをたてなおすための知識である。*bangifal* とは、*fal* の *baang* の意である。*fal* は *fale* で「カヌー格納庫・集会所」を意味する。じつは、本稿でふれようとする家屋修復の伝統的知識 *rongolibaang* とは、この *bangifal* のことなのである。*bangiyaramat* とは、*yaramat* の *baang* の意である。*yaramat* とは「人間」を意味する。このときの *baang* とは護身術である。

この 3 種類におなじ *rongolibaang* の語があてられる理由については類推が可能である。たとえば、*bangifal* のなかには、台風等の強風のために家屋の屋根全体がふきとばされたとき、その屋根をもとにもどす方法がある。*bangiwa* とは、突風などによりカヌーが転覆したさい、カヌーを海岸にまで曳行することなく海上で復原させる知識である。*bangiyaramat* とは、人におそわれたときにくずれた自分の体勢をたてなおし、相手をうちまかすという意味である。すなわち、この 3 種の *rongolibaang* の共通項からみると *baang* とは、「なんらかの原因でもとの状態をくずしていたものを、もとの状態に復させること」とかんがえられる。

ところで、J. Caughey はトラック諸島における9種の *sowuroong*<sup>24)</sup> をあげている。そのなかに、*sowupwen* という *sowuroong* があげられている [CAUGHEY 1977: 131]。pwen はエラートでいう *baang* に相当する。ところが、かれのあげた *sowupwen* とは、格闘技の専門家を意味している。すなわち、かれのいう *pwen* とはエラートでいう *bangiyaramat* にあたる。*bangiwa* ならびに *bangifal* については記述がない。

3種類 *rongolibaang* のうち本稿でとりあげるのは *bangifal* である。家屋修復の知識として *fale* の名称がもちいられる理由は、*Maliumpai* 氏によれば、*fale* がなによりもほかの家屋にくらべて大きいために、ある種の特別な知識が必要であるからとのことである。*bangifal* の名称のとおり *bangifal* は本来 *fale* をその対象とする。しかし、*Maliumpai* 氏によれば *fale* 以外の家屋をその対象とすることもある。ただし、*imwettemwaiu* で総称される *imw* および *mwaluumw, sepal* については、その対象から除外される。*imwettemwaiu* が除外されるのはさきにのべたように、出産・月経にとまなうけがれが *taubaang* の力を無効にするという理由による。しかし、家屋の構造という点からみれば、これらの除外される家屋はいずれも小規模であり、簡便な構造をもっている。それゆえ *taubaang* がのりだすまでもなく除外されるともかんがえられる。なお、*fale* 以外の家屋を対象とする場合には、のちにのべる *bangitab* をおこなう必要がない。*bangitab* とは *rongolibaang* をおこなうさいにとまなうタブーをさしている。

また、*rongolibaang* が対象とするのはそれが適用される家屋のなかでも特定の部材にかぎられている。すなわち、柱、桁、梁、垂木、棟木および屋根全体である。*rongolibaang* が対象とするのは家屋構造にあってもとくにその主要部材にかぎられるわけである。

## 2. *rongolibaang* の補助材

*rongolibaang* の作業過程でいくつかの補助材がもちいられる (表9)。それらを列記すると、つぎのごとくとなる。

- (1) *tiib*: 「テコ」。テコは突き棒 (*peshebubu*)、支点 (*langolipash*)、押し棒 (*tiib*) からなる。
- (2) *gannebong*: 「足場」。棟木を交換するさい屋内に建てられる。

24) この項の現地語表記は Caughey [1977] による。なお、本稿の表記ではつぎのとおりである。*sowurong* → *taurong*, *sowupwen* → *taubaang*, *pwen* → *baang*。

表9 補助材の使用

補助材名	柱	桁	梁	垂木	棟木	屋根
tiib	○	○				
gannebong					○	
yaramat	○	○			(○)	
paash	○	○				
bwau		○	○		○	○
faib					○	○
meleufeoiu		○				
goisham			○		○	
laango					○	
gatiyeti				○		
sogosog					○	
limmatelagrag					○	
tal		○	○	○	○	○

- (3) yaramat: 「つかえ棒」。yaramat とは本来「人間」を意味する。
- (4) paash: 「つかえ棒」。paash は2本の棒をクロスさせ、余裕をもたせてしばったもので、2本の棒のなす角度を調節することにより支える高さを自由に変化させることができる。
- (5) bwau: 固定されずに自由に動かせるようセットされる棒で、修復される部材を仮りにささえたり、部材を引き上げるためのロープを通す位置を調節するさいもちいられる。
- (6) faib: 本来「支持材」を意味するが、補助材としてももちいられる。以下では補助材としての faib を「補助支持材」とよぶことにする。
- (7) meleufeoiu: 本来「軒桁」を意味するが、補助材としてももちいられる。以下では補助材としての meleufeoiu を「補助軒桁」とよぶことにする。
- (8) goisham: 本来「梁」を意味するが、補助材としてももちいられる。以下では補助材としての goisham を「補助梁」とよぶことにする。
- (9) laango: 「ころ」。
- (10) gatiyeti: 「ものさし」。垂木の間隔をそろえるためにつかわれる。
- (11) sogosog: 修復しようとする部材が左右にふれるのをふせぐためのロープ。
- (12) limmatelagrag: ある種のヒトデの名称で、棟木が適切な位置にくるよう調節するためのロープ。
- (13) tal: 「引き綱」。



### 3. rongolibaang

rongolibaang は以下にのべる6種類7通りの技法からなっており、「柱の交換」からはじまり、しだいにむずかしいものへとならべられている。筆者が rongolibaang を伝授されたさいにもこの順番で伝授がおこなわれた。

なお、屋根の復原については、そのほかの場合とことなる。対象とする家屋は imw-tipaap である。imwtipaap は先にのべたように、垂木はただL字断面の鴨居（桁行）のうえにのせられているだけで、それだけ風にふきとばされやすいとのことである。

#### 1) 柱の交換（図13）

- (1) 交換しようとする柱にま近の位置で、tiib を桁の下にすえつける。
- (2) 交換しようとする柱の近くにすえた tiib よりも、桁の中央よりに paash すえつける。
- (3) 交換しようとする柱の上の桁とは反対側の桁に数本の yaramat をつかえ棒としてしかりつける。片側を持ちあげたさいに家屋が倒れるのを防ぐためである。
- (4) tiib を押し、桁を持ちあげる。
- (5) paash をしめつける。
- (6) 持ちあげられた桁を支えるために yaramat を paash の近くにたて、つかえ棒とする。
- (7) 柱の周囲を掘り、抜きとる。
- (8) 準備しておいた新しい柱をいれ、穴をうめなおす。

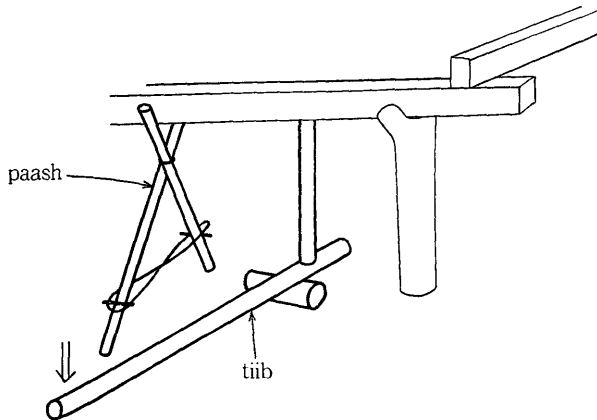


図13 柱の交換

- (9) tiib を押しあげ、桁の下の yaramat をはずす。
- (10) paash をゆるめ桁を新しい siur のうえにおろす。
- (11) 補助材をはずす。

## 2) 桁の交換 (図14)

- (1) 交換しようとする桁に平行して軒先に補助軒桁 I をしばりつける。  
これは、のき全体にわたって取り付けられるが、ふつう、補助軒桁は用意した材を 2-3 本つぎたしてしばりつけられてもちいられる。
- (2) tiib を補助軒桁 I の両端に一カ所ずつすえつける。
- (3) paash を補助軒桁 I の両端にすえつける。paash の数は、屋根の大きさしだいで加減される。
- (4) 交換しようとする桁とは反対側の桁に数本の yaramat をしばりつける。
- (5) tiib を押し、屋根の片側をうかせる。
- (6) paash をしめつける。
- (7) 補助軒桁 I の下に yaramat をたて、支えとする。本数は、屋根の大きさによって加減する。
- (8) bwau を 2 本屋内に持ち込み、それぞれ一端を交換しようとする桁の側の柱の根元にすえ、この桁行とは直角に床にねかせる。この bwau は、柱の地上部分よりもやや長めである。
- (9) 新しい桁を屋内に持ちこみ、(8) で用意した bwau の上にのせる。その位置は bwau を立てたとき、桁の高さになる位置にあたる。
- (10) 補助軒桁 II を用意し、梁よりも上の位置で垂木にしばりつける。

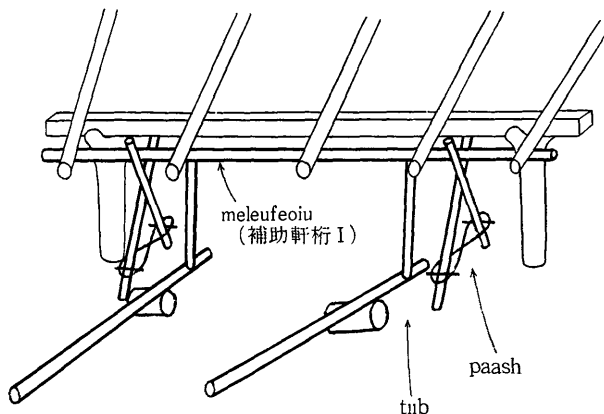


図14 桁の交換

- (11) 補助軒桁Ⅱと梁をしばりつける。桁をはずすとき梁の重みをさけ、またその脱落をふせぐためである。
- (12) 補助梁を梁よりも上部で棟束および垂木にしばりつける。棟束を脱落させないためである。
- (13) tal を2本、補助軒桁Ⅱのすぐ上の位置で屋根材のすき間を通し、補助軒桁Ⅱの上を經由して桁の両端にしばりつける。
- (14) 桁と梁、垂木をつないでいるロープを切断する。
- (15) tal でささえつつ桁をおろす。
- (16) 桁をはこびだす。
- (17) さきほどの tal を、bwau にのせておいた新しい桁に bwau とともにしばりつける。
- (18) tal をひき、桁をもちあげる。このとき bwau は桁の支えとなっている。新しい桁を所定の位置にすえる。
- (19) tiib を押し、yaramat をはずし paash をゆるめる。
- (20) 新しい桁と梁、垂木をしばりつける。
- (21) 補助材をかたづける。

### 3) 梁の交換 (図15)

- (1) 交換しようとする梁の側のどちらかの柱の根元に bwau の一端をあて、屋内の床に横たえる。bwau の長さは、柱の地上部分よりもいくぶん長くしなければならぬ。
- (2) 交換する梁よりも上の位置で補助梁 goisham を棟束と垂木にむすびつける。
- (3) tal を補助梁のうえにかける。

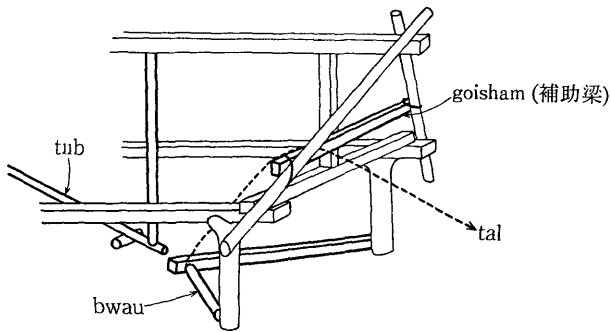


図15 梁の交換

- (4) 新しい梁を屋内にはこびいれ、その一端を bwau にのせ、他端を bwau があてられている柱とは反対側の柱の根元にあてる。
- (5) 補助梁にかけた tal を新しい梁と bwau にしぼりつける。
- (6) tal をひき、新しい梁を桁にもたせかける。
- (7) tal をはずし、新しい梁の地面についている端にしぼりなおす。
- (8) tal をひき、新しい梁ののこる端を桁の上のせる。これで新旧の梁がならんで桁にのっているわけである。
- (9) 交換しようとする側の梁の棟束の近くで、棟木の適当な位置にあたるように tiib をすえつける。
- (10) 桁と交換しようとする梁をむすんでいるロープを切断する。
- (11) tiib を押し棟木を押しあげる。
- (12) 交換しようとする梁をついて棟束をはずし、梁を下におろす。
- (13) 新しい梁を定位置にすえる。
- (14) tiib をもどし、棟束を梁の上のせる。
- (15) 新しい梁と桁をロープでむすぶ。
- (16) 補助材をかたづける。

#### 4) 垂木の交換 (1) (図16)

- (1) 交換しようとする垂木 (両端の垂木 (weoilimaat) の場合である) をむすんでいるすべてのロープを切断する。

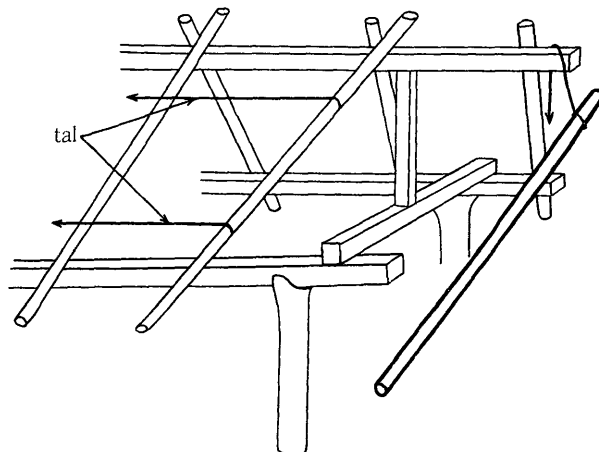


図16 垂木の交換

- (2) この垂木を適当な数箇所で切断する。
- (3) 切断した垂木をぬきとる。
- (4) 棟木に tal をかけ、新しい垂木にむすびつける。
- (5) tal をひき、新しい垂木をひきあげる。
- (6) 妻びさしの側から新しい垂木を所定の位置に押しこむ。
- (7) 新しい垂木をロープでしばり固定する。
- (8) かたづける。

#### 5) 垂木の交換 (2) (図16)

中間部の垂木の交換の事例である。ここでは妻びさしからかぞえて2番目の垂木を交換する場合をのべる。そのほかの場合でも(4)から(7)の過程をくりかえすことによってどの垂木でも移動させ交換することができる。

- (1) 交換しようとする垂木につながるすべてのロープを切断する。
- (2) この垂木を適当な数箇所で切断する。
- (3) 切断した垂木を順次ぬきとる。
- (4) はずした垂木に対して妻びさしに遠い側の垂木の上を通して適当な位置で2本(上部と下部)の tal をかけ、妻びさし側の垂木 (weoilimaat) にむすびつける。
- (5) 妻びさし側の垂木を固定しているロープを切断する。
- (6) tal をひき、あらかじめ垂木の間隔にあわせて切っておいた gatiyeti をもちいて垂木の間隔にあわせて所定の位置に垂木をはめこむ。
- (7) 移動させた垂木をロープでしばり固定する。
- (8) 棟木に tal をかけ、新しい垂木にむすびつける。
- (9) tal をひき、新しい垂木をもちあげる。
- (10) 妻びさしの側より新しい垂木を所定の位置に押しこむ。
- (11) 新しい垂木をロープでしばり固定する。
- (12) かたづける。

#### 6) 棟木の交換 (図17, 18)

- (1) gannebong を組み立てる。gannebong は、最上部の水平材までの高さの yaramat (I) および、桁の長さほどの yaramat (II) からなる。yaramat (I) を等間隔でならべたてて、最上部の水平材にしばりつける。棟木をはさんで反対側の最上部の水平材にも、yaramat (I) を等間隔でならべたて、しばりつける。yaramat (I) の本数は家屋の大きさしだいできめられる。

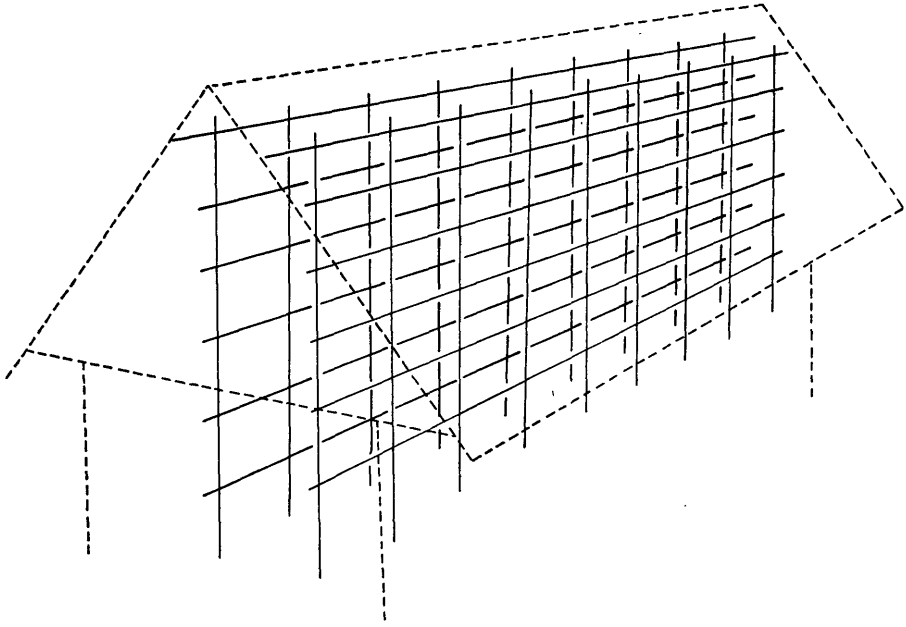


図17 gannebong の 仕 組

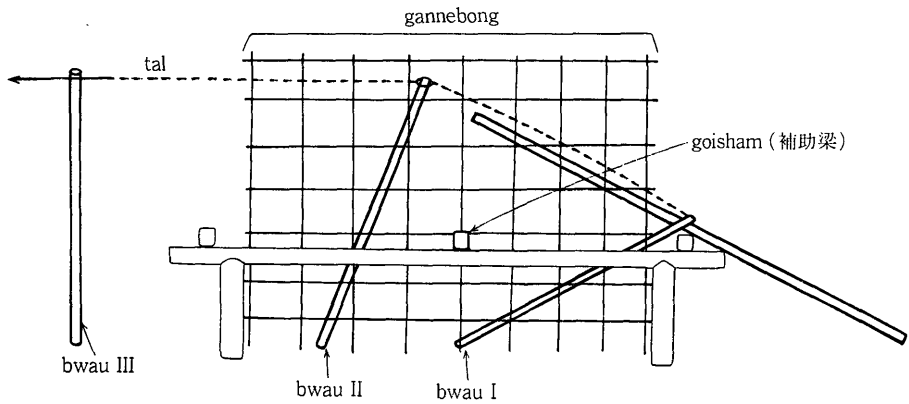


図18 棟 木 の 交 換

- (2) yaramat (II)を水平に下から順に yaramat (I) に等間隔でしかりつけていく。  
間隔は棟木の重さしだいで決められる。
- (3) (1), (2) でつくった 2 組の gannebong に橋わたし可能な長さの補助支持材 I を 2 本, gannebong の最上部で, その両端にわたしかけておく。

- (4) tal を2本棟木の両端にしばり，第2棟木の上を経由して屋根材の下をくぐらせ，屋根の外になげだしておく。この tal は十分な長さが必要である。
- (5) laango を2組の gannebong のあいだの地面に数本ならべておく。おろした棟木を搬出するためである。
- (6) 棟木にむすばれていたすべてのロープを切断する。
- (7) 屋根の外に出しておいた tal をひき，棟木を確保する。
- (8) 棟束についてはずす。
- (9) tal をゆるめ，gannebong にわたしかけた補助支持材Ⅰで確保しつつ棟木をおろしてゆく。梁は片側ずつ順にさける。
- (10) おろした棟木を laango にのせて搬出する。
- (11) 両側の梁から等距離の位置に，補助梁を桁にのせしばりつける。
- (12) 補助梁の支えとして数本の yaramat をたて，その下につかえ棒とする。
- (13) 補助梁の midpoint の直下に浅い穴を掘る。
- (14) 棟木の位置までの高さをもつ bwau を2本用意し，その先端近くに補助支持材Ⅱをむすびつけ2本の bwau を連結する。
- (15) bwau の一端を補助梁の下に穴にいれ，どちらか都合のよい側の梁の上にもたせかける。この bwau は2組の gannebong のあいだにたてられることになる。
- (16) 新しい棟木をさきほどの梁にもたせかけ，新しい棟木の midpoint が bwau と補助支持材Ⅱがむすばれた位置にくるように押しあげる。
- (17) 新しい棟木を補助支持材Ⅱとむすびつける。
- (18) tal を新しい棟木の両端にむすびつけておく。
- (19) bwau Ⅱを補助梁と bwau をもたせかけていない側の梁とのあいだにたて，bwau Ⅲを屋外にたてる。
- (20) tal Ⅱを新しい棟木の midpoint から bwau Ⅱ，bwau Ⅲとにむすぶ。tal Ⅱは十分な長さが必要である。
- (21) tal Ⅱをひき，tal と sogosog でバランスをとり，新しい棟木をひきあげる。
- (22) 新しい棟木を支える bwau が補助梁のところまできたとき，tal Ⅱを附近のココヤシ等にしばりつけ，動かぬよう固定する。
- (23) bwau を補助梁にしばりつける。
- (24) tal をひっぱり，新しい棟木の位置を調整しつつ棟束をはめこむ。
- (25) 新しい棟木につながるべき所定の材をロープでしばりつける。
- (26) かたづける。

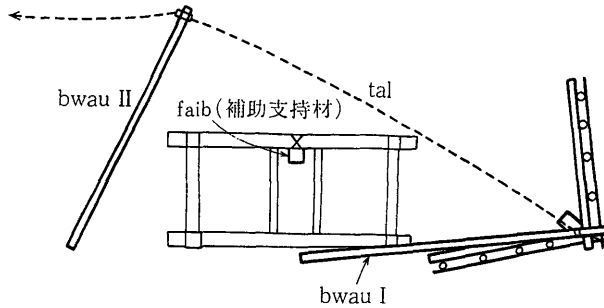


図19 屋根の復原

### 7) 屋根の復原 (図19)

- (1) 吹きとばされた屋根全体を作業に適する位置まで引きずってくる。
- (2) 両方の土台(梁間)の中心前方の適当な位置に穴を掘る。
- (3) 棟木までの高さのある bwau I を2本、それぞれ(2)の穴に一端をいれ、他端を引きずってきた屋根の棟木の先のところにあわせる。
- (4) bwau II を屋根と家屋をへだてて反対の位置に用意する。長さは bwau I と同程度の長さである。
- (5) 補助支持材 (faib) を両側の鴨居(梁間)の中央にしぼる。補助支持材の一端は、屋外につきでている。屋根を引きおこしたさい、bwau I がゆきすぎて倒れるのをふせぐためである。
- (6) tal で bwau I と棟木をしっかりしばり、bwau II を經由して、十分の長さをのこしてこれを引き綱とする。
- (7) tal をひき屋根をもちあげ、補助支持材のところで bwau I をそれにむすびつける。
- (8) tal をほどき屋根を定位置にのせる。
- (9) 補助材をかたづける。

## VI. 伝統的知識とその変容

### 1. rong と reepiy

エラートにおける伝統的知識 (rong) はだれもが知っている知識ではない。それについて、だれでも知っている知識は reepiy とよばれる。reepiy とは「实际的知識」



を意味し、転じて「利発な」とか「かしこい」という意味にももちいられる。reepiyとは、具体的にいえば、カヌーのこぎ方、ヤシの木にのぼる方法、料理の仕方など、日常生活をいとむうえで必要なことで、知っていることが当然とおもわれるような知識である。

ところが reepiy には yalius にかかわる知識が欠如している。yalius とは、エラートの人びとにとって、森羅万象にやどる精霊である。たとえば、嵐をおこすのは yalius であり、雨をふらせたり早ばつにするのも yalius である。人間が死んだり、病気になったりするのも yalius のせいである。魚がとれなかったり、パンノキの実のできがわるくなるのも yalius のせいである。そうしたさまざまな現象をひきおこす超自然的存在が yalius とみなされる。そうした yalius にかかわる知識が rong とよばれる。すなわち、rong とは、yalius のひきおこしたものがどういう現象であるの

表10 サタワル島の rong の種類 [石森 1980: 42]

1 遠洋航路に関するロン	26 マープクプクという病気をなおすためのロン
2 行方不明のカヌーをよびもどすためのロン	27 マーセニピックという病気をなおすためのロン
3 波に関するロン	28 マーキャイナップという病気をなおすためのロン
4 リーフのヤニューに関するロン	29 ニプロプルという病気をなおすためのロン
5 流木に関するロン	30 どのヤニューが病気をおこしているかを知るためのロン
6 サメに関するロン	31 精神的ショックをうけた人をなおすためのロン
7 カツオに関するロン	32 うちみ・ねんぎをなおすためのロン
8 オネキー礁に関するロン	33 外傷をなおすためのロン
9 飛魚に関するロン	34 数占いに関するロン
10 タコをよぶためのロン	35 アッキネキンという占いに関するロン
11 ティヌ魚をよぶためのロン	36 転覆したカヌーを復元するためのロン
12 パティ魚をよぶためのロン	37 カヌー小屋の建築・修理に関するロン
13 ウォリック魚をよぶためのロン	38 護身術に関するロン
14 嵐をしずめるためのロン】(ヤニューが)	39 海でおぼれた人をよみがえらせるためのロン
15 嵐をしずめるためのロン】(ことなる)	40 カヌーづくりに関するロン
16 雨をとめるためのロン】(ヤニューが)	41 行方不明者をよびだすためのロン
17 雨をとめるためのロン】(ことなる)	42 異性を惚れさせるためのロン
18 タツマキを遠くにやるためのロン	43 大災害(台風・飢饉)をうけないためのロン
19 雷に関するロン	44 イマーヌスというヤニューに関するロン
20 タロイモをよぶためのロン	45 不特定のヤニューに関するロン
21 パンノキの実をよぶためのロン	
22 ココヤシの実をよぶためのロン	
23 子どもの病気をなおすためのロン	
24 女性の病気をなおすためのロン	
25 マーポリッカールという病気をなおすためのロン	

注) ヤニューはエラート語で yalius と表記する。

かを知るための、そしてそうした事態が生じたときに、どのように対処するかなどについての知識をさしている。

サタワル島の rong についての報告 [石森 1980] には45種類の rong があげられている (表10)。rong が数多く存在する理由は、対象とする yalius がことなれば対応する rong もことなるためである。それゆえ、45種類の rong ですべての rong が網羅されているわけではない [石森 1980: 42]。

rong はある特定の yalius にはたらきかけてその助力をうるための知識の体系である。そのため、rong には yalius にはたらきかけるための儀礼やタブーをもっており、儀礼に関する知識が rong にとって重要となる。とりわけ、儀礼のなかで重要な役割をはたすのは、yalius にたいする話しかけのことばとしての呪文である。呪文もまた rong とよばれる [石森 1980: 43]。

トラック諸島の rong についても報告がある。トラック諸島における rong は呪術的儀礼 [MURDOCK and GOODENOUGH 1947: 336] であり、呪術的な専門知識 [CAUGHEY 1977: 131] である。そのなかには呪術的な歌や呪文、呪葉の調合といった知識もふくまれている [BOLLIG 1927: 43-45; LeBAR 1963: 67]。rong は、rong をとりあつかう人である taurong<sup>25)</sup> について学ぶことにより習得されるが、本来 rong は yalius を通じて人間にあたえられたものとみなされる [BOLLIG 1927: 43; CAUGHEY 1977: 132]。rong という語のもともとの意味は「聴く」である<sup>26)</sup>。すなわち、rong とは人間が yalius から「聴」いて習得した知識といえる [BOLLIG 1927: 43]。rong は、超自然的存在である yalius の知識であるゆえに、taurong は食物禁忌や性的タブーをまもらねばならず、rong の守護神にたいして食物をそなえなくてはならない [LeBAR 1963: 67]。

rong についてまとめるとつぎのようにいえる。

- (1) rong は yalius にかかわる知識である。それゆえ、だれもが知っている知識ではなく、特定の専門家のみが知る秘儀性の強い知識である。
- (2) rong を駆使しうる taurong は yalius と人間とを媒介する存在である。
- (3) yalius にはなしかけるための呪文が rong の核心部分である。
- (4) rong は yalius からささげられたものであり、それゆえに課された、守らねばならないタブーの体系が存在する。

25) この項は本稿における表記法にあらためた。J. Caughey の表記では taurong は sourong, yalius は énu である [CAUGHEY 1977]。L. Bollig の表記では yalius は önu である [BOLLIG 1927]。

26) エラートにおいては rongorong が「聴く」である。

## 2. rong の社会的意味

### 1) 財としての rong

すでにのべたように、rong を知っている人を taurong とよぶ。rong は、taurong という称号をもつわずかの人たちしか知らないという意味で社会的に稀少性をもっている。それゆえ、rong にはある種の価値が付与されており、rong を伝承している taurong には威信が付与される。

J. Caughey によれば、トラック諸島において、人びとが所有していることが望ましいとされている4種の財産がある。それは、「土地 (fénú)」、「食物 (mwéngé)」、「品物 (pisek)」、「専門知識 (roong)」である [CAUGHEY 1977: 53]。人びとは、これらの財産をふやしたり、あらたにえるためにさまざまな努力をする。rong は、まさに無形財産 [GOODENOUGH 1951: 52-56] であり、土地や食物、品物あるいは別の rong とひきかえることも可能である [CAUGHEY 1977: 60-61]。この点はエラートにおいても例外ではない。男にとってなんらかの rong を知っていることは、名誉であると同時に、rong はなにかをうることのできる財であった。かつては rong を習得するために若者たちは競って taurong のところにかよいつめたのである。rong は、個人にとってのみ有益な財産であるばかりではなく、その個人が所属する集団にとっても貴重な財産であった。

### 2) 継承される rong

rong の継承には2通りの方法がある。ひとつは特定の血筋をたどって継承される場合であり、もうひとつは「弟子入り」をして rong を習得する場合である<sup>27)</sup>。

第一の方法にはさらに2種のものがある。まず、男系をたどって継承される場合である。つまり、チチからムスコへの継承である。母系社会では、チチとムスコは所属する集団がことなるわけであるから、この場合 rong はチチの集団からムスコの集団

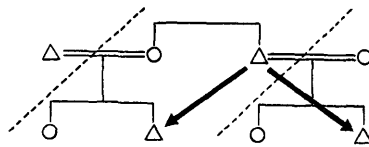


図20 rong の 継 承

注) 破線は出自集団がことなることを示す。

27) 杉浦健一によれば、ヤップ島にもこうした秘密の知識を継承する2通りの方法があった [杉浦 1939: 141]。

へと移譲されることになる。逆にいえば、数多くの rong を知る男と結婚するということは、rong を手にいれることでもある。いっぽう、taurong には自分が所有している rong を自己の集団の財として次世代につたえることが要請されている。そこで、taurong は自己の女キョウダイのムスコへと rong をつたえる。すなわち、rong は母方のオジからオイへと継承されるわけである。図20は、rong が特定の血筋を通じて継承されていくさいのモデルである<sup>28)</sup>。

のこる rong の継承法は「弟子入り」の場合である。自分の所属する集団のなかにすぐれた taurong がいない若者、あるいはあらたな rong を追求しようとする若者は taurong のところに毎晩のようにヤシ酒や魚を持参し、taurong が病気になれば世話をしにでかけなければならない。taurong は、自分のところにやってきた若者のなかから優秀で、しかも自分にたいして親切をかかさぬ者をえらび rong を教えはじめる。若者がもしその rong の全容を知ろうとするならば、かなりの謝礼をはずまなければならない。その謝礼としては、伝統的にはおもに腰布 (toer) がもちいられた [杉藤 1982: 78-79]。

rong が継承されるのは、ふつう男性のみである。ただし、女性が rong を学ぶ場合が皆無とはいえない。それは、先にのべたチチームスコ、オジーオイといった関係にもとづいて継承されるべきはずのところ、なんらかの理由でしかるべき男性の継承者がいない場合におこなわれることがある。すなわち母系出自集団の財産である rong をうしなわずに次の世代に伝授するために女性が rong を学ぶわけである。したがって、この場合、女性の taurong は、かならず自分のムスコにのみ教え、「弟子入り」による継承法はおこなわれなかった<sup>29)</sup>。

### 3. 伝統的知識の変容

1950年代にはいって、中央カロリン諸島の島じまは、つぎつぎとキリスト教(カトリック・イエズス会)に集団改宗していった。エラートが改宗したのは1954年のことであった。ただし、改宗の動機となったのは宗教上の理由ではなく政治的なものであった。エラートをふくむカロリン諸島西部の島じまは、ユリシー環礁モグモグ島に従属している。そのモグモグ島がキリスト教に改宗したとの知らせがたえられた。そのため島じまは一斉にキリスト教に改宗したのであった。改宗の動機が政治的なものであれ、キリスト教に改宗するということは、結果として宗教的におおきな変化をひ

28) 母方のオジからオイへという継承ルールは、トラック諸島でもおこなわれる [MURDOCK and GOODENOUGH 1947: 336]。

29) 女性による知識の継承はトラック諸島でもみられる [GOODENOUGH 1951: 51]。

きおこした。

rong が伝統的なカミである yalius にかかわる知識であり、yalius とのコミュニケーションの部分で rong の核心部分を占めていたために、それだけキリスト教の受容によってこうむった変化はおおきかった。一神教であるキリスト教を受容することは森羅万象に遍在する yalius は排されるということである。したがって、数多くの yalius とのコミュニケーションは必要でなくなり、yalius にかかわる知識としての rong もまたその大半は必要性をうしなってしまった。

ところが、現在でも人びとのあいだで伝承されている rong が存在する。カヌーによる航海術、カヌー造船術、転覆したカヌーの復原、家屋の建築・修理、病気治療などに関するものである。これらに共通していえることは、これらの rong はすべて、特定の明確な技術の体系をふくんでいる点である [石森 1980: 45]。

こうした技術は、現在の社会生活においても、いまだに実用的価値をもっている。ところが、キリスト教を信じる以上、yalius を信じることは許されない。そのため、yalius にかかわる部分を切りすて、技術的部分だけを継承しなければならなくなったのもやむをえないことであった。現存している rong はまさに yalius ぬきの rong、つまりカミぬきの伝統的知識である [石森 1980: 45]。以下、伝統的知識の変容について、家屋に関する知識を例に考察をすすめることにする。

エラートでは家屋に関する伝統的知識には2通りのものがあるとかんがえられている。それは、家屋の建築および家屋の修復に関する知識である。すでにのべたようにエラートでは、家屋の修復に関する知識は rong とされ、rongolibaang と名づけられている。それにたいして、家屋の建築に関する知識は、rong であるとはみなされず、したがって rong のつく名称をもつ知識は存在しない。

ところで、エラートでは、家屋の建築もしくはカヌーの建造に関する知識を保持している者は、sennap とよばれる。sennap という称号は tausennap とはよばれはしないものの taurong のひとつとされている。しかし、taurong の一員である場合の sennap は「家大工」を意味せず、「船大工」を意味している。いっぽう sennap に rong をつけて造語をつくることができる。rongolisennap である。これは「カヌー建造に関する知識」を意味するが「家屋建築に関する知識」を意味しない。つまり、「家大工」は sennap であるにもかかわらず taurong ではなく、いっぽう rong の種類をさす名称には、rongolisennap という語が存在するにもかかわらず、それは「家屋建築に関する知識」ではなく、「カヌー建造に関する知識」を意味している。こうした事実には、その理由としてつぎの点がかんがえられる。それは、家屋の建築に関

する知識のかなりの部分がだれもが知っている知識とみなされているからである。

伝統的な家屋の建築にあたって、その部材は、クギを一本もつかわずにココヤシロープでしばられるだけである。そうしたロープのしばり方はだれもが知っている知識、つまり *reepiy* である。また屋根をココヤシの葉のマットでふくこと、これもまただれもができることである。あるいは小屋組の方法についても同様である。これらの知識は *rong* ではなく *reepiy* とみなされている。

ところが、家屋の建築に関してひとつだけ *reepiy* ではないとみなされているものがある。それは、主要部材の長さの比などに関する計測法にかかわることがらである。とはいえ、それらについて聞きとりをするうえでさほど抵抗がなかった。つまり、秘密の知識というとりあつかいをうけていない。また、計測法に関して *rong* の語を接頭辞にもつ語も存在しない。つまり計測法に関する知識は *rong* でもないとかんがえられている。

J. Caughey はトラック諸島における *rong* を 9 種類あげている。その筆頭にあげられているのが「家屋の建築に関する知識」である [CAUGHEY 1977: 131]。家大工である *sowuwimw*<sup>30)</sup> は家屋の部材の長さの算出法、家屋の方向、建築過程、その過程の各段階で必要な呪葉の調合法を知っている。かれは家屋の部材の秘密の名を知っている。そして、かれの知識には、家屋を空中にとぼしたり、部材をまとめあげるための妖術 (*sorcery*) もふくまれている [CAUGHEY 1977: 133–138]<sup>31)</sup>。J. Caughey のあげたトラック諸島における事例がエラートにおける本来の「家屋建築に関する知識」であると仮定するならば、現在、エラートのそれが *rong* でないとされながらも、*sennap* という称号や計測法についてのあいまいさをもっていることの説明がつくようにかんがえられる。

すなわち、*rong* はかつて *yalius* の力によって裏づけられ、*yalius* により人間につたえられたものであった。しかし、キリスト教が受容されたために大きな変化を余儀なくされた。公開の場で、人びとの面前でおこなわれなければならない家屋の建築や家屋の修復に関する伝統的知識はとりわけ変質をせまられたとかんがえられる。つまり、かつての *rong* の本質は、呪文をとなえたり、一連の呪術的な行為をともなう秘儀性にあり、現実におこなわれている作業過程をみてそのとおりを「まね」ようにしても「まね」ができないのが *rong* であった。そして、*rong* は、かぎられた人びと

30) この項は Caughey [1977] のトラック語表記による。なお、本稿の表記はつぎのとおりである。 *sowuwimw* → *tauimw*

31) ヤップ島では、かつて家屋の建築にさいし、占いや祈りがかならずともなったとのことである [杉浦 1939: 143–145; 小林 1978: 46–47]。杉浦健一は家大工は祈禱師であると同時に技術家であるとのべている [杉浦 1939: 144]。

のみが知りえた知識なのであった。それにたいし、現存している rong の大半は、rong の本質である呪文や呪術などの秘儀に関する部分はずでうしなわれており、現実におこなわれる作業をそのまま「まね」ることができれば、それが rong の全容を「まね」たことになるわけである。

筆者が taubaang である Maliumai 氏から伝授された rongolibaang は rong とよばれるものの、もはや rong の核心部分である呪文はふくまれていない。Maliumai 氏が rongolibaang の伝授をうけた時期は、すでにキリスト教が受容されてのちのことであった。それゆえ、かれは rong のうち yalius にかかわる部分を伝授されなかったわけである。しかし、かれの rongolibaang には、伝統的な rong のすがたの一部がのこされている。それは、bangitab とよばれており、tab とは「タブー」であり、bangitab とは「家屋修復にかかわるタブー」を意味している。

家屋の修復をおこなう日、taubaang および作業を手つだう者たちは起床してから作業が終了するまでのあいだ、水をのぞいて一切のものを口にはならない<sup>32)</sup>。またヤシ酒づくりなど毎早朝におこなわれる仕事もおこなってはならない。そのかわり、補助材のあとかたづけをのぞいて一切の作業が終了したとき、作業に参加した者たちはともに食事をとる。

また、かつての rongolibaang のうち、呪文に関することがらについて、Maliumai 氏はわずかに記憶にとどめている。ただし、その具体的な内容は一切記憶されておらず、たんに伝聞したものが記憶されているにすぎない。それは、rong の伝承の系譜にかかわる部分、rong の守護神である yalius への依頼の部分、および作業後の食事のさいにおこなわれる呪文についてである。

taubaang は、作業をはじめようとするとき、まず、これからおこなうとする rong の伝承の系譜に関する呪文をとる。呪文は、rong を人間につたえた yalius の名からはじまり、代々その rong をつたえた taubaang の名を順をおってあげてゆくことではじめられる。自分の名前が最後にくるわけである。そして、rong をつたえた yalius にたいし、これからはじめようとする作業を見守り、援助してくれるようにたのむ。そのあと ragish (*Calophyllum inophyllum*) の若葉とココヤシの若葉（緑色）をあわせココヤシの若葉（白色）でしばったものを御幣をふるようにふる。これを

32) サタワル島において sówpwáng (taubaang) がおこなう魚に関する食物禁忌についての詳細な報告がある。それは、カツオ・マグロに関するもので、作業中にその尾部を食べ、その他の部分は食べてはならないというものである [秋道 1981b: 101-102]。

エラートにおいては、魚に関するタブーは聞きとれなかったが、bangitab の対象となるのは一切の食べもののほか、ココヤシやタバコもふくまれる。

bangibeng とよぶ。なお、bangibeng はそのほかさまざまな儀礼のさいにもおこなわれたとのことである。

作業が終了すると、作業にかかわった全員があつまって食事をとる。このとき、taubaang はまず食物をひとつまみとって空にむかってなげ、yalius にたいして作業の無事を謝する旨呪文をとなえた。これは ronglibaang の作業を霊的な力でささえた yalius にたいする供物とみなされている。

以上のべてきた家屋に関する2種類の伝統的知識について、その変容に関して比較するとつぎのごとくとなる。

- (1) 建築に関して rong という語を冠する知識の体系は現在存在しないが、かつては存在したと推測される。いっぽう修復に関しては rongolibaang という語が存在する。
- (2) いずれの知識についても、もはや yalius にかかわる知識は存在しない。ただし、修復のさいには、bangitab がおこなわれる。
- (3) 建築に関する知識は、もはやだれもが知っている知識である reepiy にちかい存在になっており、特定のルールにしたがって知識が継承されることはない。それにたいして、修復に関する知識については rong の継承ルールが現在もまもられている。

## Ⅶ. お わ り に

本稿では、エラートにおける家屋の建築および修復に関する伝統的知識について民族誌的記述をおこなってきた。しかし、そのなかで十分にふれることのできなかつた問題がいくつか存在する。本稿をむすぶにあたって、今後へのこされた課題についてふれたい。

- (1) rong とは、本来、超自然的存在である yalius にかかわる部分がまさに核心部分であった。ところが、キリスト教の受容後、たとえば本稿に記述した rongolibaang の場合のように、現存する rong は yalius にかかわる核心部分が欠除している。しかし、ある年齢以上の老人は現実に使用しないにしても rong のかつてのすがたを記憶にとどめている可能性がある。したがって、rong の核心部分をともなかつたかつての姿をとどめる rongolibaang を記録にとることが急務とかんがえる。この点は何にも rongolibaang だけにとどまらず、rong 全体の問題でもある<sup>33)</sup>。

33) この問題については石森秀三がすでに強調している [石森 1980: 45-46]。



- (2) 本稿では、ひとりの taubaang の知識にもとづき記述をおこなった。しかし、今後の課題としては、別の taubaang から知識をえて比較研究をおこなうことが必要である。rong は yalius によって人間につたえられたものであり、rong がつたえられた時と場所がことなれば、その内容もまたことなっているはずである<sup>34)</sup>。rongolibaang の場合、とりわけその技術の比較がこころみられるべきである。
- (3) rong の核心部分である呪文には rong に関する伝承の系譜がふくまれている。したがって、rongolibaang にとどまらず、多数の rong の伝承の系譜を比較研究することにより、rong の系譜を通してみた島嶼間関係を把握できるとかんがえる。
- (4) Maliumai 氏によれば、rongolibaang の意義はつぎの4点である。
- a) 修復しようとする構造材以外にはできるだけ損傷をあたえないようにする。
  - b) したがって、作業後に大規模な補修は不用である。また、家屋の全体的な解体修理も rongolibaang のおこなうところではない。
  - c) 作業は、できるかぎり少人数でおこなう。
  - d) 作業はできるかぎり短時間でおこなう。早朝からはじめ、昼すぎ頃までに完了せねばならない。

以上4つの rongolibaang の意義をふまえて、仕事の量についてかんがえる。仕事の量を人数と作業時間の積とする。すると一定量の仕事の量を機械の力をかりることなく人力だけでやりとげるためには、2通りの方法があるとかんがえられる。すなわち、大人数を投入して短時間ですます方法と時間をかけてできるだけ少人数ですます方法である。ところが、Maliumai 氏によれば、rongolibaang の場合、少人数でしかも短時間のうちに作業をおこなうということを前提としている。これが可能であるのは、伝統的には yalius の力によるとみなされていたが、yalius なき現在でも同様に可能であるとかんがえられている。この場合、rongolibaang の各技法自体もまた少人数・短時間という作業目標にしたがって考案されているとみるべきであろう。すなわち、rongolibaang は、エラートの人びとのもつある種の合理性にもとづき実践される民族建築学ということが出来る。そこで、こうした合理性をあきらかにすることが今後にとされた重要な課題とかんがえられる。また、合理性についてあきらかにすることは、なにも民族建築学としての rongolibaang の問題にとどまらず、エラート社会における「文化価値」についてあきらかにする手がかりとかんがえる。今後、この問題の展開を期したい。

34) rong の内容が、つたえられた時と場所によりことなるという点については J. Caughey も言及している [CAUGHEY 1977: 134]。

## 謝 辞

筆者の長期滞在を許可し、あまつさえ本稿に記述した rongolibaang についてご教授いただいたエラートの酋長 Maliumai 氏にたいして、深甚なる謝意を表したい。氏の協力なしには本稿はかたちをなしえなかった。また、エラートにおける筆者の「父親」であった Sautal 氏および「兄弟」であった Chigwemal 氏をはじめ、エラートの人びとにたいしても、深く謝する所である。

本稿をまとめるにあたって、前半部分の家屋の建築・修復に関する具体的な問題については、国立民族学博物館の1981年度共同研究班「日本および周辺地域諸民族住居の比較研究」（研究代表者・杉本尚次国立民族学博物館教授）において発表させていただいた。後半部分の伝統的知識 (rong) に関しては、おなじく共同研究班「象徴・分類・認識についての民族学的研究」（研究代表者・松原正毅国立民族学博物館助教授）において発表させていただいた。そのさい、班員の方がたから貴重な助言をいただいた。また、1980年度には、おなじく共同研究班「中央カロリン諸島における伝統的航海術の民族学的研究」（研究代表者・石森秀三国立民族学博物館助手）に参加させていただき、さまざまな示唆をうけた。

国立民族学博物館の秋道智彌助手、石森秀三助手、須藤健一助手には、調査の段階から公私にわたってことばにつくせぬさまざまな援助をたまわった。また、国立民族学博物館共同研究員としてサタワル語辞典の編纂に協力しておられる Sabino Sauchomal 氏にも本稿をまとめるにあたりご協力いただいた。

お世話になった国立民族学博物館関係各位にたいし、あらためて、こころからお礼をもうしあげる所である。

調査にあたっては、ミクロネシア連邦移民局長の Quirino Mendiola 氏およびヤップ離島大酋長の Hathey 氏にはひとかたならぬご助力をたまわった。両氏の調査にたいするご理解なしには本稿もかたちをなしえなかった。あらためて、こころからお礼をもうしあげる所である。また、ヤップ島在住の宮井十郎氏にもたいへんお世話になった。ここに記して謝する所である。

## 文 献

### 秋道智彌

- 1980a 「Satawal 島における伝統的航海術——その基本的知識の記述と分析——」『国立民族学博物館研究報告』5(3): 617-641。  
1980b 「“嵐の星”と自然認識——サタワル島における民族気象学的研究——」『季刊人類学』11(4): 1-51。  
1981a 「“悪い魚”と“良い魚”——サタワル島における民族魚類学——」『国立民族学博物館研究報告』6(1): 66-133。  
1981b 「魚・イメージ・空間——サタワル島民の航海術における位置 認識のしかたについて——」『季刊人類学』12(2): 3-46。

### ALKIRE, William H.

- 1965 *Lamotrek Atoll and Inter-island Socioeconomic Ties*. The University of Illinois Press.  
1970 *Systems of Measurement on Woleai Atoll, Caroline Islands*. *Anthropos* 65: 1-73.  
1972 *Concepts of Order in Southeast Asia and Micronesia*. *Comparative Studies in Society and History* 14(4): 484-493.

### 浅川滋男

- 1980 「ウートがたちあがるまで——トラック諸島トル島におけるウート建築過程の報告——」『季刊人類学』11(3): 112-175。

- BOLLIG, P. Laurentius  
 1927 *The Inhabitants of the Truk Islands: Religion, Life, and a Short Grammar of a Micronesian People*. (Translated in 1967 from the German, *Die Bewohner der Truk Inseln: Religion, Leben und kurze Grammatik eines Micronesiervolks*. Anthropos Ethnologische Bibliothek 3(1), for Human Relations Area Files.)
- BURROWS, Edwin Grant and Melford E. SPIRO  
 1970 *An Atoll Culture: Ethnography of Ifaluk in the Central Carolines*. Greenwood Press, Pub.
- CAUGHEY, John L.  
 1977 *Fáánakkar: Cultural Values in a Micronesian Society*. University of Pennsylvania Publications in Anthropology.
- DAMM, H. and SARFERT E.  
 1935 *Inseln um Truk Pt. 2: Polowat, Hok und Satowal*. In Thilenius, G. (ed.), *Ergebnisse der Südsee-Expedition 1908-1910, II*. Ethnographie, B. Micronesien 10, Friederichsen, de Gruyter & Co..
- DAMM, H. et al.  
 1938 *The Central Carolines, Part 2: Ifaluk, Aurepik, Faraulip, Sorol, Mogemog*. (Translated from German, *Zentralkarolinen, Part II; Ifaluk, Aurepik, Faraulip, Sorol, Mogemog*. In Thilenius, G. (ed.), *Ergebnisse der Südsee-Expedition 1908-1910, II*, Ethnographie, B. Micronesien, 10, Friederichsen, de Gruyter & Co., for Human Relations Area Files.)
- GOODENOUGH, Ward H.  
 1951 *Property, Kin and Community on Truk*. Yale University Publications in Anthropology (46).
- 石森秀三  
 1979 「サタワル島の数占い——その基本体系について——」『国立民族学博物館研究報告』4(2): 157-250。  
 1980 「ロンの世界——カミとつきあう知識の体系——」『季刊民族学』13: 40-46。
- 小林繁樹  
 1978 「ヤップ島家屋の構造と建築過程」『リトルワールド研究報告』(2)。
- KRAMER, Augustin  
 1932 *Truk*. (Translated in 1968 from the German *Inseln um Truk. Pt. 1*. In Thilenius, (ed.), *Ergebnisse der Südsee-Expedition 1908-1910, II*, Ethnographie: B Mikronesien Vol. 5. Humburg; Friederichsen, de Gruyter & Co., for Human Relations Area Files.)  
 1937 *The Central Carolines, Part 1: The Lamotrek Group, Woleai, and Fais*. (Translated in 1968 from the German, *Zentral-karolinen, Part 1; Lamotrek Gruppe, Oleai, Feis*. In Thilenius, G. (ed.), *Ergebnisse der Südsee-Expedition 1908-1910, II*, Ethnographie, B. Micronesien, 10, Friederichsen, de Gruyter & Co., for Human Relations Area Files.)
- KUBARY, J. S.  
 1895 *Ethnographische Beiträge zur Kenntnis des Karolinen Archpels*. P.W.M. Trap.
- LEBAR, Frank M.  
 1963 *Some Aspects fo Canoe and House Construction on Truk*. *Ethnology* 2(1): 55-69.  
 1964 *The Material Culture of Truk*. Department of Anthropology, Yale University.
- LESSA, William A.  
 1977 *Traditional Uses of the Vascular Plants of Ulithi Atoll, with Comparative Notes*. *Micronesica* 13(2): 129-190.
- MATSUMURA, Akira  
 1918 *Contributions to the Ethnography of Micronesia*. *Journal of College of Science* 40(7).
- 松岡静雄  
 1943 「ミクロネシア民族誌」岩波書店。

杉藤 家屋の建築・修復に関する伝統的知識と技術

MURDOCK, George P. and Ward H. GOODENOUGH

1947 Social Organization of Truk. *Southwestern Journal of Anthropology* 3(4): 331-343.

中村基衛

1977 「ミクロネシア・プルスク島における家屋と住まい方」『国立民族学博物館研究報告』2(3): 565-589。

SOHN, Ho-min

1975 *Woleaian Reference Grammar*. The University Press of Hawaii.

SOHN, Ho-min and Anthony F. TAWERILMANG

1976 *Woleaian-English Dictionary*. The University Press of Hawaii.

染木 照

1945 『ミクロネシアの風土と民具』彰考書院。

須藤健一

1979a 「カヌーをめぐる社会関係——ミクロネシア・サタウル島の社会人類学的調査報告——」『国立民族学博物館研究報告』4(2): 251-284。

1979b 「カヌーと伝説——中央カロリン諸島における伝統的航海術の一考察——」『民博通信』4: 37-55。

1980a 「星と潮と波と——カヌー遠洋航海同乗記——」『季刊民族学』13: 55-64。

1980b 「コメント——浅川滋男「ウートがたちあがるまで」」『季刊人類学』11(3): 177-182。

杉本尚次

1977 『地域と民家——日本とその周辺——』明玄書房。

1980 「コメント——浅川滋男「ウートがたちあがるまで」」『季刊人類学』11(3): 175-176。

杉田 洋

1981 「オーストロネシア諸語」北村甫編『世界の言語』（講座言語第6巻）大修館書店，pp. 198-230。

杉藤重信

1982 「エラート環礁の腰布」『季刊民族学』19: 74-82。

杉浦健一

1939 「未開社会に於ける技術家」『ドルメン』5(4): 141-146。